

## 第 3 回

# 円山動物園リスタート委員会

会 議 録

### 第3回 円山動物園リスタート委員会

- 1 日 時 平成18年8月28日(月) 13:30から18:00
- 2 場 所 円山動物園内 動物園プラザ
- 3 出席者 委 員：大谷薫、きくち美由紀、斉藤英昭、高木晴光、服部信吾、原はるみ、原田昭、山本光子、笠康三郎  
事務局：円山動物園園長、種の保存担当部長、管理課長、飼育課長 ほか
- 4 議 事
  - (1) 議題抽出と改善策について  
原田委員長による私案のプレゼンテーションを含む
  - (2) 次回議題と日程調整

## 1. 開 会

原田委員長 それでは、ほぼ時間でございますので、第3回円山動物園リスタート委員会をこれから開催したいと思います。

きょう欠席の方は、大川委員、岡田委員、小宮委員ですね。

金澤園長 きょうは、大川委員、岡田委員、小宮委員、小林委員が欠席でございます。

13名中9名が出席しており、成立しております。

それから、資料の確認をさせていただきたいと思います。

今回は資料は余りないということで、事前にお送りした分も少なかったのですが、今回は資料1の円山動物園の主な検討課題というものと、事前にお配りしたものの時点修正されたA3裏表の資料で、市民アンケートの8月24日時点での結果でございます。そのほかに、参考資料としまして、市立大学のワーキング検討資料というものがございます。それから、「ホースメイト」というものがありまして、先日、上野の小宮委員がお話しされていましたが、その論文を本として出されたものの抜粋でございます。それから、「ニュースウィーク 世界の動物園&水族館」というものがあります。残念ながら、この中には日本の動物園は入っておりませんが、参考にいただければと思います。そのほか、本日お配りしたものとしましては、原田委員長がつくられている「大学の地域連携と動物園の再生」と、A3の色のついた資料がございます。

以上が本日お配りしている資料でございます。

## 2. 議 事

原田委員長 きょうの議事は、課題の抽出と改善策ということで、前は少し時間が短かったようでございますので、今回も同一議題を継続して行いたいと思います。全体の進み方からいきますと、今回が第3回委員会で、9月の第4回委員会では構想案の検討ということになっておりますので、構想案の検討のスケジュールを余りずらすことなく進めていきたいと思います。したがって、前回からの継続であります課題の抽出と改善策については、きょう、またいろいろご意見をいただきまして、極力、出し尽くしていただいて、その後に構想案をつくる作業に入っていきたいと考えております。そういうわけで、次回は9月20日になると思いますけれども、そこで構想案をご検討いただくという日程で考えておりますので、きょうは忌憚のないご意見をいろいろいただきたいと思っております。

まず、先ほど資料のご紹介がありましたけれども、この資料のご説明をいただきたいと思っております。

金澤園長 それでは、資料の説明をさせていただきます。

資料1は、事前にお送りしたものと変わっておりませんで、目を通されていると思いますので、説明は省略をさせていただきます。

資料2の市民アンケート、中間集計表を説明させていただきたいと思っております。

これは、札幌市が1万人アンケートを実施している中に、動物園の関係を入れております。8月24日時点で、1万人のうち3,174件が回答されておりますので、それについて分析したものでございます。

その裏側の方に、円グラフがたくさんございますが、これで説明させていただきたいと思っております。

まず、動物園の必要性ということで、欠かせない存在だと思うが32%、あった方がいいと思うが59%ということで、この両方を合わせますと91%ということで、動物園の必要性については今の時点では市民のご理解を得られていると思っております。それほど必要だと思わない、必要ないというのを合わせて6%ですから、必要性については十分理解いただいているのかなと思っております。

また、必要な理由の中では、大きな順で申し上げますと、子どもが本物の動物に触れたり見たりすることによって情操教育の場となるというのが59%、レジャー、憩いの場というのが25%、それから、自然環境保護や環境教育という視点では14%ということで、結構大きな割合が占められております。

それから、必要ないという理由では、おもしろくない、動物がかわいそう、税金を使っただけやる必要はないのではないかという視点で整理されております。

それから、魅力アップの方法としては、動物園の展示方法の工夫、老朽化した施設の新築、イベント系の充実、売店や駐車場などの設備関係、それから、ガイドや解説といったところが大きな割合を占めております。

それから、この中で一緒に聴しておりましたが、定休日は、今、動物園は年末の12月29日、30日、31日の3日間だけで、それ以外は休みなくやっております。そんなことで、ほかの動物園だと週1回という定休日があるものですから、その辺でできるかできないかという将来性を確認する意味でアンケートをとっています。通年で週1回の定休日ならいいが27%、月1回の定休日ならいいが31%、冬の間なら週1回くらいはいいが19%となっており、現状肯定派は17%と少ないので、もしかしたら冬であれば休みの設定も不可能ではないと思っております。

それから、その下のところに社会的役割というものがございまして、この中で求められているのは、環境教育や啓発の充実、それから北海道の動物、憩いや癒しの場、総合学習との連携、そして動物の命というところが多くなっております。

そういう意味では、きょうは3回目ですが、委員会で議論されているところと大体同じような傾向が反映されているのかなと思っております。

あとは、入園料とか年間パスの料金や駐車料金については、そこに書かれているような状態ですが、駐車料金については高いというのが48%を占めていますので、ちょっと困ったなと思っております。

それから、今回の夏休みの入園状況を簡単に報告させていただきたいと思っております。

夏休みは、中学校であれば7月25日から8月25日くらいまでであるのですが、7月下

旬から8月上旬にかけて、真夏日が1週間続きまして、ちょっと暑い時期がありました。そんなことがあって、その時期は例年と比べて落ち込んでおりますが、その後、回復してきました。

また、夜の動物園を8月11日から15日までのお盆の期間に設定しました。昨年までは、夜の動物園は、5時から9時までで2日間の設定だったのですが、5日間に延長しました。その結果、8月11日から15日の5日間で3万人、そのうち夜の動物園だけ、つまり5時以降だけで見ると約1万人の入園者がありました。前回の委員会でも夜間延長ということが議論されていましたが、そういうことにも耐えられる数字なのかなと思っております。

ただ、動物園としては、去年は2日間でしたが、こしは5日間連続でやりましたので、動物はちょっと疲れていたようです。せいぜい週1回なり2回くらいがいいところなのかなと思います。動物にとっては、なぜ夜遅くまで起こされているのかちょっと理解できないだろうと思いますから、そういう意味では、ちょっとストレスになっているのかなと思っております。

こしの4月から8月中くらいまでとらえた中では、全体としては去年の30%アップくらいで推移していますから、この委員会で議論されているようなことを先行的に実験的なイベントとして組んでやっていますので、結構効果があらわれているのかなという理解しております。

以上です。

原田委員長 ありがとうございます。

ただいま、アンケートについての報告がございましたが、これについてご質問等はありませんか。

(「なし」と発言する者あり)

原田委員長 ないようでございますので、次に進めさせていただきたいと思っております。

ここに配られております検討課題という資料につきましては、内容がかなり大部でございますし、また途中段階ということで、それぞれお読みいただいて、次の構想案チェック等にお使いいただければと思っております。

それでは、前回は余り意見を出す時間がなかったとか、最初の方の社会的な役割とか、動物園の基本的な役割についてということが多かったように思いますので、できるだけディスカッションの時間を長く取るということで、きょうは終りの時間も大分拡張させていただいております。

金澤園長 5時までを予定しておりますが、私どもは5時を過ぎても構いません。

原田委員長 そういうことでございますので、よろしくお願ひしたいと思っております。

きょうは、私の方で、私なりの考え方で一つの方向性をまとめてみました。まだ完全にまとまっている段階ではありませんが、こういうふうにと考えたら新しいタイプの動物園としてスタートできるのではないかというアイデアと構想についてまずごらんいただいて、

お話を聞いていただいて、先ほどアンケートにありましたような課題や方向づけについて委員の先生方からいろいろご意見をいただきたいと思います。

まず最初に、ここに色のついたプリントがございますが、これは、動物園あるいは円山地区が札幌市の中でどのように位置づけられているのかというあたりをまずつかんでおく必要があると私はかねがね思っておりまして、我々ワーキンググループとして、こんなふうな位置づけになっているのではないかということで、非常に仮説的なものでございますが、まとめたものでございます。

まずはこのあたりから、パワーポイントで取りまとめておりますので、それをごらんいただきたいと思います。

まず、よりどころとして、少し前まで市役所の中の企画調整局と言われていたところが、今は市民まちづくり局という名称に変わって、機能も大分変わったと思いますけれども、そこで市のまちづくりについての企画を取りまとめているということでございますので、そのあたりの資料から、この動物園をまちづくりの中にどのように位置つけたらよいのかということを考えてみたものでございます。

まず、上位計画としましては、平成12年に第4次札幌市長期総合計画というものがつくられまして、現在でもその方向で推進されております。ここで、円山動物園が位置づけられている円山地区がどのように取り上げられているのか、あるいは、かわりを持っていくのかというあたりからご説明していきたいと思います。

ここに円山動物園リスタート計画構想としてありますが、反面、私どもの立場としては、大学という新しくできた組織が地域と連携した動物園の再生をとらえようとしたときの視点、そのような意味で今回取りまとめたものでございます。

緑を感じる都心の街並み形成計画が、昨年9月に取りまとめられました。これは、創成川の開発と、駅前の重層計画といいますか、地下も含んだ開発プロジェクトを含めて報告書が作成されておりますけれども、その冒頭に上田市長が書かれている文章がございます。

「都市間競争と言われて久しい中で、札幌は恵まれた自然環境などの風土特性と大都市としての魅力を十分に生かしながら、世界に誇れる環境と文化のまちをつくっていくことが重要です」と書かれています。

ここから、この円山動物園というものがどのように位置づけられるのかということを考えてみました。

この第4次札幌市長期総合計画は、平成12年につくられたものですが、平成20年まで継続して、札幌市が推進していくと計画されておりますが、札幌市のオープンスペースネットワークの形成を図るため、点在するオープンスペースの機能分担と機能的連携並びに実態的連続というものを打ち出しております。

絵にかきますと、札幌都心地区というものを中心に据えて、中西部山ろく地区というのが左下でございますが、旭ヶ丘（公園）も含めて、その一帯が円山地区というふうに呼ばれているところでございます。

中心から左下にグリーンが斜めに引かれておりますけれども、このベルトが都心の大通から円山地区へ向けて伸びてきて、この円山地区に突き刺さっているという形になっております。これが基本的なネットワークというふうに見てとれるのではないかと思います。

平成11年に、長期総合計画ができる1年前に緑の基本計画というものがつくられております。これによりますと、札幌市のように高密度な土地利用、高い環境負荷が集中する地域においては、持続性が担保されていない私有緑地は年々減少しつつあるため、札幌市では、円山地区を含んだ環状グリーンベルトの整備を取り込んでこの計画をまとめているということでございます。

図のようにオレンジ色が札幌の中心地になりますが、そこを中心として、札幌市を取り巻くこのようなグリーンベルトが構想されているわけです。

なぜグリーンベルトなのかということについては、後ほどご説明を申し上げたいと思います。

また、モエレ沼公園は、右上の北を向いたマークの左側に丸をかいたあたりだと思えますが、それも一つのグリーンの拠点になっております。

緑の基本計画における円山公園の位置づけというのは、市内の緑地を環状に結ぶ環状グリーンベルト構想と、藻岩山緑地ゾーンというベルトの中の一拠点として位置づけられております。

札幌市内の公園整備方針としては、北国の風土にふさわしい公園づくり、環状グリーンベルト構想の推進、災害に強いまちづくりに資する公園、都市と自然との共生、訪れる人すべてにやさしい公園ということでございます。

都市まちづくり計画は平成14年につくられたものですが、ここで円山公園地区は中西部山ろく地区というふうに位置づけられております。そこでの整備目標は、都心に最も隣接した山地系森林を形成する。二つ目に、動物園、神社などが集積し、札幌の自然特性を身近に享受しながら多様な活動ができる場である。三つ目に、森林を初めとする自然環境の保全と人が身近に自然を楽しむ機能の充実を図ることがこの地区の整備目標とされております。

この計画を重ね合わせて考えてみますと、このような大きな円は札幌市の中心地区でございますが、東側の垂直の線は、今、創成川の開発プロジェクトを行っているところでございます。それから、真ん中の水平軸は骨格軸と呼ばれていまして、これが大通公園を含んだ大通でございます。それが、ちょうど中西部山ろく地区の円山地区にぶつかっているという関係になっております。

そのようにして、円山地区というエリアは、札幌の中心と少し離れておりますけれども、緑のグリーンベルトとしてかなり重要な軸の線上に乗っているということが見てとれます。

1993年に生物多様性条約が国連環境開発会議で締結されまして、日本も早速それを受け入れたということになるわけでございますが、我が国としましては、第1次の環境基

本計画を経て、2000年に第2次環境基本計画の閣議決定をし、2002年に生物多様性条約に基づいて、今度は各国の戦略としてどのようにするのかという計画をまとめております。日本も、2002年に、関係閣僚会議でこの新生物多様性国家戦略の決定を見たというところでございます。

この国家戦略の目的は、人間生存の基盤であり、豊かな生活・文化・精神の基盤である生物多様性の保全とその持続可能な利用によって自然と人間が共生する社会をつくり出すのだということでございます。このような新生物多様性国家戦略というのは、今、環境省で、緑のカバーのついた本なのですが、そういうものにまとめられております。

生物多様性というのは、すべての生物の間の変異性をいうものとし、種内の多様性、生物種間の多様性並びに生態系の多様性を含むというふうに定義されています。バイオダイバーシティという言葉が生物多様性の英語でございますけれども、1986年にナショナルリサーチカウンシルというものが開催した最初のアメリカ生物多様性フォーラムの報告の中でつくられた言葉でございます。

このようにして、今、アメリカもヨーロッパも、多くの動物園で、バイオダイバーシティという言葉キーワードにして、新しい動物園づくりに変革しつつあるというのが実態のようでございます。

私は、ウェブ等でいろいろ探してみたのですけれども、生物多様性という言葉を外している動物園はどうやらないようです。名のあるところはほとんど生物多様性をかなり重要な軸として動物園の柱にしているということを知りました。

そこで、生物多様性の概観ということでございますが、生物というのは、植物、動物、これは魚類、昆虫、哺乳類、爬虫類、両生類といろいろございますけれども、今、生きているものは世界で3,000万種類くらいあるようです。そのうち、日本は9万種以上あると言われております。世界の哺乳類は6,000種で、そのうち日本の哺乳類は241種です。世界の鳥類は9,000種で、日本は700種です。世界の昆虫は95万種で、日本は3万種です。世界の維管束植物は27万種で、日本は8,800種です。このような数値にあらわれておりますように、小さな国ではあるけれども、かなり多くの種類の生物を多様に生息させている環境を保有しているわけです。

世界の生物種は年々減少しつつあり、絶滅している種が毎年出ているということで、このままいくと、生物はだんだんいなくなって、実は人類が生きていくために必要な生物もいなくなっていくということにつながる非常に危険な状態を生み出していく。そのために、それを保全、再生し、それを我々人類の生活の維持のために持続可能な利用、活用をしていくと。食べたり、いろいろな材料として使ったり、それぞれの国がそれぞれの国の戦略として、どのような方向でそれを維持していくのか表明せよということが求められております。グリーンが必要だというのも、目に見えてきれいだといった美的な感覚としての美しい環境をつくるということだけではなくて、生物多様性の保全と再生という意味でグリーンベルトというものが必要であるとされている、私はそのように理解しております。

そこで、絶滅のおそれのある野生生物、希少的な野生生物というものは、国際的なレッドデータブックがつくられておりますけれども、日本は日本なりに絶滅のおそれのある野生生物を特定しなければならないということになってきています。

そこで、環境省は、1991年に我が国のレッドデータブックをつくったわけですが、その後、これは年々つくり変えられております。

また、それぞれの国には気候・風土、いろいろな区域、区分がございまして、北海道も一つの区域であり、北海道の西と東では大分異なった種の分散が見られるということもありますが、北海道の希少野生生物、北海道レッドデータブック2001というものが発行されております。その中には、動物573種、植物511種が収録されております。これは北海道レッドデータブック作成部会というところで作成されているわけですが、それがどんなものかという写真までついております。ホームページにもございますので、検索するとすぐ出てくる形になっております。

各国、各国の区域ごとにレッドデータブックがつくられてるのが現状でございます。グリーン計画、グリーンをどこにどのように通すのか、グリーンの形成の構成要素をどのようにするのかということも踏まえて、生物多様性の軸からまちづくりを考えていくという時代に着々となりつつあるのではないかと私は考えています。

そこで、生物多様性の保全と活用という意味では、ここに三つ書いてありますが、これは環境省の国家戦略のテーマでございます。一つ目は都市化により減少しつつある生物多様性の保全・強化、二つ目は失われた自然を再生・修復していく自然再生の提案、三つ目は都市機能と共存する持続可能な自然の活用、この3点でございます。

それでは、動物園は、生物多様性という環境保全・活用という戦略の中でどのように機能すればよいのかということを考えていきたいと思っております。

一方では、まちづくりとしての緑のゾーニングが進められていますが、そこで生物多様性によるまちづくりといったものが考えられないだろうかと思っております。

そこで、生物多様性イコール緑、あるいは生物が生存できる環境、いろいろな生き物が楽しんで生きるエリアが緑ではないか。緑といっても、生物は水なしには生きていけませんので、水も含んだ緑のゾーニングが非常に重要なまちづくりの軸になってきつつあると私は考えるわけです。

そうしますと、生態的に重要なコアエリア、核となるエリアと地域、自然再生エリアというものを接続して、ベルトをつくるという意味は、いろいろな環境の変化で、ある生物種が生き延びられないということになった時に、その場所を移動しなければいけないのです。そのために、種の分散とか移動を容易するためにベルト状のネットワークを形成していれば、移動しながら自分が生き延びていく生息環境を得ることができる、そういう意味でベルトがつくられているのではないかと、私はそのように考えております。

その中で、ただのベルトだけでは成り立たないのではないかと、そのベルトの中に核となるエリアが点在していくというイメージで考えられるのではないかと。もう少し言ってしまう

うと、その核となるエリアの一つに円山地区のグリーンエリアが考えられるのではないかとのことです。

そこで、円山動物公園構想としましては、生物多様性の環境形成を行う拠点として、コアとなる拠点として円山動物公園を位置づけてはどうか。これは、動物園という動物が集まっているエリアだけではなくて、動物が生き延びていくためには、どうしても緑が必要であり、水が必要です。そういう意味で、円山の原始林とすぐ隣接した地域にある動物園を結びつけて、円山動物公園と称した核エリアをつくっていくというのが大きな構想の目標となるべきであろうと考えたわけです。

水がどこにあるかということを探してみましたら、円山と動物園の間にちょっとした谷がありまして、耳を澄ますと水が流れているのです。円山川と呼ぶのですけれども、それが円山動物園の正門を出た右側に木道がございます。この前紹介していただいたばかりですが、しっとりとした水が流れていて、スギがたくさん生えていて、木の板の道がその間を縫っていくというしっとりとした環境がございますが、動物園の東側に沿って南から北へ向けて水が流れているわけがございます。円山地区はこのように森と水と動物の三拍子がそろっておりますので、ここを緑のベルトのコアエリアと位置づけることができるだろうと思います。行く行くは、札幌センター地区の大通公園というグリーンベルトと真っすぐ連なることを目指すことによって札幌というまちが成長していけるのではないかと、そのように考えたわけでございます。

この構想は、単に円山動物園の再生を図るだけではなく、札幌のポテンシャル、活力を活用して、札幌の持続性社会へ向けて無限の可能性を秘めている生物多様性に関する市民の理解や技術革新の取り組み、地域社会への貢献並びに札幌市の目指す緑と文化創造都市の実現に役立つであろうと。この取り組みを地域やさまざまな形で活用して、命を愛する感性をはぐくみ新たな文化の創造を目指すということが、新しい円山動物園の目標となるであろうと考えたわけでございます。

そこで、この構想をリアライズしていく枠組みとしまして、まず一つ目は、生物多様性に関する産・官・学・市民の横断的組織化というか横断的連携ということですが。

二つ目は、地域と動物公園の連携ということで、この動物公園を大事なものとして見なしていく、そういう活動を動物園みずから行う必要があるのではないかと。行く行くは、この地域の誇りとして、うちには動物公園があるというような意識を持っていただくということが必要ではないかと。

三つ目には、生物多様性保存活動と文化の創造ということで、環境を保全しながら新しい文化をつくっていくということです。これは、これからの人類が新たに直面するアクションではないかと考えるわけでございます。

それと同時に、四つ目には、環境問題というのは、どうも経済の足を引っ張るというイメージが今まではずっと強かったわけですが、この環境問題を解いてこそ、経済活動はうまく回るという仕組み、循環するシステムが構築されていく、そういうイニシアチ

ブを札幌はとるべきではないか。その核として、あるいは発信源として円山動物公園という拠点が機能できるのではないかと私は考えているわけでございます。

これの実現に向けて、市民一人一人の生物多様性保全に向けた動物公園の役割に対する意識を高める、それによって恵まれた自然環境などの風土特性を生かした生物多様性を基盤とした緑と文化ネットワークの創造都市といった拠点形成を円山動物公園で目指したいというわけでございます。

そこで、少し中身に入っていきわけですが、上から下に流れているブルーの筋が円山川で、下の方から上に向けて、南から北へ向けて流れております。

真ん中のピンクのところは円山動物園で、その上のブルーのところは神社です。神社は右に寄り過ぎているかもしれませんが、その周囲が西側にスポーツエリアがあって、球場や陸上競技場やテニス場などがございます。

西の方に、もう一つ円山公園があります。昔はユースホステルがあったようですが、それは現在はなくなって、円山公園として森のようになっているということでございます。ちょうど円山原始林と西側の円山公園の間に挟まれてこの円山動物園があります。

もう一つ、ちょっと注意しておくべきは、この南側に、道立児童相談所身障者相談所特殊教育センターというものがございます。その下に特別保養老人ホームがあります。さらに下に西円山病院、その右側に旭山病院がありまして、いわゆる癒しを必要としている施設が南の方に点在しているということがございます。

また、右上の方に丸がありますけれども、道立札幌医科大学でございます。

そんな位置づけでございますが、ここで円山動物園のみが新しく再生するよりも、先ほどから言っておりますように、緑のゾーン、緑のエリアとしてこの地域全体を一体化した地域として、これを動物園を含んだ公園としてリスタートしていこうということです。これは、来年とか再来年という話ではございませんで、まずは長期的な目標を掲げてみるのはどうだろうかと思っております。

それと同時に、今、神社と円山を挟む、それから動物園を挟んだ地域の間には自動車道路が走っております。これは危険であるので歩道にならないかというような声も聞かれるわけですが、もしここを歩道にして、公園の歩き道として、車の乗り入れがない環境になるならば、生物多様性の保全という意味でこの地域がもっと生きてくるのではないかと考えられます。

そこで、この円山生物多様性拠点というこの拠点を中心としたエリアは、円山動物園、円山原始林、円山川、円山公園、円山競技場、市街区、北海道神宮、大倉山シャンツェ、それから旭山まで含んだあたりをエリアとして構想できるのではないかと。さらに、もう少し北側に三角山等がございますので、その山並みともつながっておりますので、そこまで延ばすという考えもあるのではないかと思います。

ここに記しましたのは、第1回委員会のときに、ここの動物園で飼育されている動物の

状況ということで、希少動物の飼育現状の表が配付されましたけれども、これは、希少種及びワシントン条約の類に該当する生物種であるという断り書きがございます。これは、必ずしも先ほどご紹介しました北海道のレッドデータブックに載っているものだけではありませんで、世界的に絶滅が危惧されるものがここに記載されているわけです。私は、こういうものを円山動物園で生物多様性種として取り上げるのと同時に、ここでもたびたび話題に出ておりますが、北海道独特の種を円山動物園できちんと保存していく、再生していく、持続的な活用を行っていくということが必要なのではないかと考えております。

ここから動物園の中の話に入ってまいります。これは、第1回委員会で配られた資料をもとに、動物園の中の施設が年代ごとに、最初は10年、その後は5年ごとにどのように建設されてきたかという足跡をたどって見たものでございます。

このように、最初は、赤色の施設ですが、熱帯動物館・熱帯植物館とは虫類館・昆虫館という大きな建物が二つできまして、そこに人がいっぱい集まったということがスタートしております。その次に、オレンジ色の施設ですが、世界の熊館、類人猿館、ハクチョウ舎、猛禽舎というものができ上がり、その後に黄色のオオカミの放養場、モンキーハウス、総合水鳥舎、さる山、こども動物園等ができ上がり、その後にグリーンのタスマニア館ができ上がりました。それから、1990年から1994年に、薄いブルーの動物科学館と熱帯鳥類館ができ上がり、それから、濃いブルーの動物園センターとキッズランドが97年にでき上がって、その後に紫色のチンパンジー館とリスザルドームとフクロウとタカの森ができました。

このように、いろいろな種類の生き物がここで飼育されるようになってきたということのを5年ごとにあらわして見たものでございます。

その結果、非常に複雑な道が網目のようにでき上がりました。私は、最初にここを訪れたときは、どういうふう歩いていいのかわからなかったというのが実感なのですが、こういう場合には、動物園をぐるりと回遊できるような大通りをつくって、そこから枝を延ばして、この館に行ってまた大通りへ戻ってくる、それからまた別の館に行って大通りに戻ってくるという形で、大きな通りと小さな通りをぐるぐる回していくという形でつくりますと、歩き方がわかりやすくなるのではないかと思います。全体のゾーニングの問題もありますけれども、基本的には人は道に沿って歩いていきますので、道の作り方がこのあたりで少し手を入れないとなかなかわかりにくい、それがスムーズな受け入れにつながりにくい結果になっていると思います。

そこで、私が実際に歩いてみましたので、それをこの地図の上であらわしてみたいと思います。この赤い印が正門を示しておりまして、左側に科学館、右側に動物園センターがありますが、この入り口から入ってどのように動いたのかというのをごらんいただきたいと思います。

この記録はGPSを用いて8月17日のデータを記録したものでございます。

道が細かくありますけれども、これは1分ごとに点を結んで、赤いところで何分かスト

ップしています。赤いところはストップ地点で、滞留しているところです。四角いマークは通過地点をあらわしています。

右のタスマニア館の方から歩いていって、ここは熱帯動物館のところですよ。そこから白鳥池へ横断をしているところでございます。

いろいろな遊具がありまして、実は、この池の左下を通過して、この池を渡ったあたりに鳥がいましたが、そこをのぞいているということをお知らせしております。

ここでしばらく、中にどういう鳥がいるのだろうかというのを見ているのです。

そして、この道を通って、熱帯植物館でしょうか。

手前が昆虫館で、は虫類館があつて、植物館があります。

中を見て、そこから出て、今度は総合鳥類館の方に来ています。ちょうどペリカンがいるあたりだと思います。

今度は、ここから熱帯鳥類館の中に入って、それから、アザラシを見えています。アザラシのプールのあたりです。

そこから、クマがいるところに来ています。

ホッキョクグマがいるところを通過して、正門から一番遠いところに来ています、このあたりはラマがいるところですよ。その隣がラクダなのですよけれども、ここからこのようにずっと移動しまして、オオカミを見て、チンパンジー館を通過して、モンキーハウスのところに来ています。

これで、正門から世界の熊館に行くまでに約1時間かかっています。そして、上から下に、まだ正門に戻るのに約1時間かかっているのです。正門から入って右のルートから行きまして、さる山を見ると、どうしても熱帯動物館の方が気になって、そちらの方に行ってしまう。そうすると、そこで順路がちょうど交差してしまつて、元の道の延長線上の動物館を見るのをどうしようかという不安を持つのです。ルートの設計上、そういうことが大分気になったところでございます。

こうしてモンキーハウスを後ろにして、熱帯館へ行きます。

これは、トラを見て、ライオンを見て、ダチョウを見て、シマウマを見て、その後にかバがいて、キリンがいます。この夏のキリンは元気で、子どものキリンも親によくついて歩いていまして、よく食べ、よく動くということで、割と人気があつたように思います。

ゾウは、いつも向こうを向いて、貧乏揺すりのようなことをしています。これは、どうしてそうしているのかわかりませんが、それでもたくさんの人が見えました。

こういうふうには、約2時間で園内を回れるのですが、子どもの手を引いたり、ベビーカーを押したりして歩くと2時間半から3時間くらいかかるのではないかと思いますけれども、そういう時間の中で、人はどこに立ち寄つて、どこにじつととまって、どのルートをたどつて最後に出てくるかということが、今はこのようにビジュアルではっきり記録できる技術があります。ですから、アンケートで聞くよりも、実際にどこにどれだけとまった

のか、そこにはきっと何か魅力のあるものがあるに違いない、つまり魅力度を計算するための滞留時間の長さのようなものが、GPSをポケットに入れているだけでわかってくるのです。できれば9月の構想案を取りまとめるまでに、現状の魅力度の分布図のようなものをつくってみたいと考えています。

これが私のたどった道のりですけれども、正面入り口から、実際にはこういうふうに回っていったのです。さる山あたりで、どうもこっちへ来てしまうという流れになっているのです。そうすると、白鳥池はキッドランドの向こう側にありますので、全然見ないで、最初のうちは、ハクチョウがいるはずなのに見過ごして戻ってきてしまうということがあります。

一般的なルートは、オオワシとかオジロワシとかコンドルなどを見て、こども動物園をちょっとのぞいて、リスザルドームをのぞいて、食堂・売店を左にしながら、ゾウ、トラ、ライオンの熱帯動物館を見て、モンキーハウスを見て、チンパンジーを見て、トナカイを見る。トナカイまで行くと、あの辺は臭気がたまっているところなので、すぐに引き返してオオカミのところへ行っているような感じがします。あそこで勇気を持って奥まで行く人は余りいないのではないかと思います。それでラクダを見て、ラマのところは通り過ぎて世界のクマを見て、アザラシのありに来る。

朝10時に出ますと、ちょうど12時ころのアザラシの食事どきになるのかどうかわかりませんが、どういうわけか、いつもアザラシにえさをやっているのです。魚を与えて、子どもが非常に喜んで見るわけです。そうすると、大人もたくさん集まってきて、あの辺がにぎやかな状況になります。

そして、フラミンゴのところへ来ると、本当にこんなところにすんでいるのだろうかという感じの殺風景な環境です。ところが、中に入ると、青々とたくさん木が茂っていて、時々水が落ちてくるので、これはなかなかいい仕組みだなということがわかるのですが、あの外側のフラミンゴの環境はちょっとかわいそうな感じだなという気がします。

そして、水鳥、ペンギンあたりも、旭山に比べると雲泥の差というか、余り人がいないというか、ペンギンがかわいそうな感じになります。

それから、熱帯植物館を見て、ここの昆虫館は、チョウチョウが飛んでいるのはわかるけれども、ほかの虫が余りよくわからないという感じです。

それから、ワニはなかなかすばらしいと思いますけれども、もうちょっと緑があってもいいかなという印象です。

それから、オランウータンのところは、いつもひとりで寂しそうという感じで、暇そうにしていて、草も生えていないので、たまっている土を指で一生懸命いじっているのですね。これがオランウータンの遊んでいる姿だろうかという感じがするのですけれども、特に外側にいるときの状況がもうちょっと何とかならないかなという感じがします。

さる山は非常に人気が高くて、さる山のレストハウスも子どもがいっぱい入っていて、サルもたくさん寄ってきていて、隠されたえさを一生懸命探していますので、ここは人が

たくさんいます。

でも、このあたりに来ると、子どももかなり疲れていて、何に乗って回っている方がよっぽど楽だと、大人が考えているのと全く同じように、何かに乗りたいと言い出すのです。だから、ここは、乗る興味もあるけれども、休みたいという感じの場所になっているかなと思います。

それから、白鳥池というのは、すごくよどんでいて、濁っていて、水面にいろいろなものがいっぱい浮いている感じですが、ちょうど池を渡る橋がいろいろな水鳥のふんで汚れているのが常で、あそこにきれいなひらひらしたスカートで行くと汚れてしまうという印象があるような気がします。

それで、さる山へ戻って、食堂・売店、フクロウ、カンガルーがいます。フクロウもなかなかいい姿をしていると思いますけれども、白いフクロウがいつも地べたにいて、じっと見ていると向こうが目をそらすという感じなのですね。これは何とかならないかなという気がします。

そして、カンガルーのところへ来るのですが、カンガルーも余り愛想がよくない感じで、これは人間の勝手なわけですが、それで動物センターのところに戻って一巡するという感じです。

非常に感じたのは、11時から入ると、ちょうど飯どきに一番高いところに来るのですが、あそこは何もないのです。木の陰も余りなくて、はげ山のようになっています。それで、円山公園の方は、ちょうどロープが張ってあって、向こうへ行ってはだめとなっているのですが、向こうの方が涼しそうでいいなという思いをみんながしているのではないかなという感じがします。

ちょうど世界の熊館あたりの周辺も、きれいな緑のゾーンにはなっているけれども、大きな立木がないので、陰がなくて、この夏は非常に暑かったという感じがします。

そういうことで、このあたりの休憩所というのはいいのですが、あの休憩所の形が非常にクローズな、教会のような形をしていて、なかなか入りにくいところがありますので、もうちょっとオープンにするために壁を破った方がいいのではないかなという感じがしました。

この世界の熊館の奥あたりにおいしいレストランができると、ちょっとその先が道路になっただけで、道がこう走っていますので、こういう奥のレストランというのもあっていいのではないかなと思います。それで、この休憩所を少し直して、ここでクロスするような感じであってもいいという感じがします。また、このあたりに水があるともっといいなと思います。この辺から水が流れているともっともったいいなという感じがします。

円山川というのはこの左側を流れているので、この水を上の方から引いて、こちら辺に少しためた水を白鳥池の方に流すというのも一つの考え方だなという感じがしました。

先ほど言いました道ですけれども、このように非常に複雑にたくさんの道がつくられているということで、太い道路をループ状に回して、そこからくるくる動物を見るためのル

ートをつくっていくというのがいいのではないかと思います。

水受けはこういうところにありまして、方向としてはこういう流れで、ここは深い谷のようになっていて、ここは斜面になっています。そういうところを使った親水エリアというような方向もこれからの動物園の新しいエリア開発として考えられるのではないかと思います。

これをどうするかという問題ですけれども、今のままではハクチョウや、ここにちょっと珍しい足の長い鳥がいたようですが、そのあたりの資源が人に触れないでいるというのは、ちょっとかわいそうだなという感じがします。この水鳥のゾーンをもっと生かすべきであろうと思います。また、3時間もいると、どうしても水が欲しくなりますので、どこか中央に水のゾーンを持ってくるべきだろうと思います。

動物園機能の構造化ということで、先ほど園長からございましたが、今、私どものワーキンググループは14名で構成してありまして、それプラス学生という形でいろいろな作業を行い始めているところですが、そういう先生方や学生の意見等も含めてリストをつくりまして、それを構造化して、このように目に見えるような形で作り上げてみました。

まず、円山動物公園というものがあって、それは生物多様性の環境拠点であるというところから考え方をまずする。これをどういう機能で支えるべきかということから考えますと、まずは動物園全体のデザインをつくる機能が働かなければならないだろうと思います。最初に長期整備計画というものがあって、次に施設のゾーニングはどこから手をつけるのかということを考えるべきであろうということです。

これは、大きなかたまりとして、幾つか丸い玉を張ってありますけれども、個々の動物で建物をつくっていくと、動物園は建物だらけになってしまいますので、大まかな気候・風土でゾーニングをしていくということです。

特に、私は最初に訪れたのは真冬で雪が降っていたのですが、そのときに、雪でも見れる、雪でも動物と触れ合える動物園というのはすごいなと感激したのです。ただ、雪国の人にとっては、また雪が降ってきたかという感じに見えるらしいのですけれども、観光客の立場から見ますと、札幌は雪が降って当たり前だろうと思うのです。そういうときに、では動物園の建物はどうあったらいいのかということと考えますと、動物ごとの建物が点在していると、外へ出るのは寒くなるわけです。それを、雪に当たらないように覆いをかけてそれぞれを結んでいくと。簡単に言うと、パイプで全部結んでしまって、そのパイプの中を人が歩くという形です。

私の芸術の森の大学というのは、清家清という建築家が設計した見事な建物なのですが、これも、一切雪に降られずに1日いられるようになっているのです。全部が覆われた廊下であり、建物であり、すべて廊下でつながっているという仕組みになっているので、雪に当たらないわけです。

それは非常に軽い形でいいと思いますけれども、もしそういう仕組みを円山動物園に設けるとするならば、このゾーンに分けて、中の幾つかの施設を簡単なパイプ状の通路を設

けてつないでいくという仕組みにすると、冬の動物園の形ができ上がるのではないかと私は思ったわけです。まだ絵をかけていませんけれども、施設の連結をするということです。

それから、エンリッチメントという面では、施設設計でだれもが口にするのは、円山動物園のクマがかわいそうという感じがするのです。クマというのは、歩くところの面のすぐ上に大きな太い爪が出ていまして、コンクリートの地面を歩くと、その爪が鳴って響くのです。カチカチ鳴るわけです。これは、山の地面であればそういう音はしないのに、この人工的な環境でカチカチ音を鳴らしているのは、クマ自身にとっても何となくそぐわない、快適な暮らしをしていないと感じているような気がしてくるので、動物にとって暮らしやすい環境づくりというものがやはり必要ではないかと思えます。見る人にとって見やすい展示という形だけではなくて、動物にとってすみやすい環境づくりが必要ではないかと思えます。

これは旭山ですけれども、ユニバーサルデザインマニュアルという意味で出しました。

これは、東のレストランへ登る階段なのですが、非常に長くて急な階段なのです。それを、こういうふうに回遊式の道がつくられていまして、乳母車や車いすで行く人は階段を上るのは大変なので、ここを回遊して周りを見ながらゆっくり上がってきなさいというような意味が込められています。私は、動物園は余り急ぐところではないので、急いで行くような仕組みのものは必要ないと思えますけれども、やはりそういう工夫をしていかなければいけないと思えます。

それから、回遊道路については、先ほど申し上げたとおりでございます。

それから、3時間もいますと、必ずトイレに行きますので、ここに入るのかという感じのトイレが出てくると、まいったなという印象を持ちます。やはり、円山動物園のトイレは格好いいとか、美しいとか、クリーンだとか、これもイニシアチブだと思いますけれども、そういう印象をつくり出していくべきではないかと思えます。

それから、動物園とのふれあいのためのいろいろな施設の設計と同時に、情報の設計が必要になります。ウェブとかコンテンツの制作を考えていく必要があると思えます。今は、ホームページを見て格好いいところに行くという時代になっています。大学もそうですが、カタログやダイレクトメールを見て行くというのではなくて、ほとんどみずからウェブで検索してから行くのです。そこでいろいろな特徴をつかんで、来週はそこへ行こうというふうに決定しているわけですから、ホームページのコンテンツというのは非常に重要な意味を持っていると思えます。

そういう意味で、情報系のITを駆使したホームページをつくり出していく必要があると思っています。

二つ目は、展示の企画機能です。まず、展示のシステム設計をする必要があります。例えば、こっちから行きますと、動物というのはいつもおりに入っていますけれども、おりの外にこういう被膜を網でつくって、それをうねうねと動物園の道路に流して行って、その中をえさを食べるに動物が歩いていくと。そうすると、人と動物がすれ違えるわけです。

動物を動かそうという考え方ですね。動物の歩き道をつくって動かすというのはどうだろうかと思っています。

それから、複数種の同居展示ということで、ガラスで囲う方が安全かもしれませんが、見た目には同じような風土・気候を持った地域の動物が1カ所で見られるという仕組みの展示が必要だと思います。

それから、これは触れ合いということで、今、ここに写真を出していませんが、えさをやらないでください、あるいは手を出さないでくださいと書いているのですけれども、えさを動物園で用意して、動物の一定のえさやりの時間に子どもにやらせると。そうやって触れ合っていないと、ただ見るだけということになりかねませんので、どうやって子どもと生き物が触れ合うのか、これは、さわるということではなくて、触れ合うやり方を考える必要があるのではないかと思います。

これも旭山ですけれども、わざわざ透明のドームをつけて、向こう側にはえさがあったり、サルにとっても休み場所があったり、どうしてもサルがここで休みたくなるということにドームをつけて、そこで人はサルを見ているのです。ですから、全体を見ているのではなくて、そこに来たサルを見るといった見せ方をしているのです。これも非常に理にかなった見せ方のような気がします。

例えば、このどこかにトラかライオンがいるはずですが、とにかく遠いのです。この岩の向こう側が熱帯動物館の内側になっているのですけれども、ここにトラがいるということは、熱帯動物館の内側に入ってもトラがいないのです。いるかなと思って入ったら、トラは外にいますという説明があるわけです。それで、もう一度入り口から出て、ぐるっと回ってここまで来なければならないのです。だったら、トラが外へ出ているときは、ここに橋をつけて、この上を渡り廊下にして、室内から外へ、このつり橋を渡らせてでもいいから上からトラを見せるような見せ方があっていいのではないかと思います。こういう細いつり橋でいいと思いますが、そういうものを渡したらいいのではないかと思います。

もう一つは、ここのアザラシはとっても人気があるのです。子どもは大好きで、ぬめぬめしたものが岩にもぶつからないでよく泳いで、えさを手に持つと、必ず上に伸び上がって、口をあけて食べさせてくれというしぐさは、とってもかわいいとみんなが思うのです。それで、ここに人が一人いますけれども、この人が顔を出すと、向こうからも寄ってくるわけですよ。ですから、向こうから寄ってくる窓なのですが、ここを丸い窓にして、内側にアクリルのクリアなチューブを通して、こっちから入り込んで、中をはい回って出てくると。子どもはそれでいいと思うのです。立ったまま入れなくてもいいから、ここにチューブを通してしまって、中を子どもにはいずり回らせて出す。これでキャーキャー言うに違いないと思いますが、そういうやり方もあるのではないかと思います。大人ももぐり込んでくるかもしれませんが、放っておけばいいと思うのです。

それから、アップダウンの見せ方が、こういうところにも必要だと思います。これはライオンですが、みんな奥の方で寝ているという感じですが、例えば、今、外から谷

を見て、谷の向こうの岩場のライオンを見ているという感じですが、向こうにも窓をつけて、これが見える。こっち側にも窓をあけて、こっちからも見える。見る場所の位置をいろいろ変えて、そこをループにしてやるという見せ方もあるのではないかと思います。

ちなみに、これは旭山ですけれども、上の方から下を見ているのです。ここにクロヒョウがいるのです。クロヒョウを見ていると、向こうの人がこっちを見ているのですね。目が合っているわけではないですが、何となく横を見てしまうという感じですが、下から上を見上げている見方、こっちは上から下を見下ろしているという見方を同時にさせているのです。こういう見せ方はなかなかいいと思います。

下にいる人は、あそこに行けば近くで見れるということで、ずっと回って見に行くわけです。そして、上から見ている人は、下から見るとどう見えるのかということで、上から下におりていくのです。途中も窓があいているので、そこから見えるというふうに、いろいろな方向から、いろいろな位置から見せるという見せ方をしています。

それから、これは夜間ですけれども、夜間は夜間の見せ方があるのではないかと思います。ただ下を明るくするよりも、明りのつくり方を工夫した方がいいかなと思います。裸電球という感じになると物寂しさが出てきますので、もうちょっとにぎやかで楽しいという感じの明りですね。お祭りだとちょうちんで十分なのですが、照明のつくり方は何かあるのではないかと思います。下から棒を中くらいのところまで上げてくるという手もあるかなと思います。

水を流すというのは、これも旭山ですけれども、もうちょっと上の方から水を流しています。暑いときは水が非常に救いになります。

もう一つは、ちょうど大森林の円山があり、水があり、生き物がいる、そういう三拍子そろった環境があるわけですから、そういうところを子どもにはちゃんと見せなければいけないと思うのです。それが、生物多様性保全の基本条件だと私は思います。

そういうふうにして、展示の企画の内容をつくり上げて、それを実行に移していくということが必要ではないかと思います。

修繕計画については、そういう大きな計画を推進するばかりではなくて、いずれにしても、毎日お客さんが来るわけですから、そういう人たちに快適な環境をどのように与えるかということについては、非常に細かいプログラムをきちっと実行していく必要があると思います。

経営問題についてですけれども、経営問題もかなりたくさんの要因を含んだクラスターを形成しておりますが、一つにはマーケティングの問題があると思います。人は一体何に興味を持って来るのか。先ほどのアンケートでは、情操教育が1番で、娯楽・レジャーが2番で、環境学習が3番目という形のアンケート結果が出ておりましたけれども、環境学習を娯楽にし、情操教育にするという考え方があっていいのではないかと思います。そういう意味で、ただ遊びにいかせるだけの動物園ではなくて、あそこに行ったらとてもおもしろかったよと。ただ実験をしても、それをマジックだと思うというのが子どもだと思

ます。きょうは科学の実験がすごくおもしろかったというくらいの驚きをするのが子どもなわけですから、こういう子たちに、生命の不思議なところ、生物のおかしなところ、人間とは違うなというところをがんがん見せつけてやるべきだと思います。

それから、危ないところは、みんなロープを張って行かせないようにしていますが、子どももそんなにあほうではないので、滑って転んだらそれは自分の責任ということではないかと思えます。そういう場所であるという認識を持たせる、野生は怖いという認識をさせる必要があると思うのです。野生に触れさせないと、だれもそういう認識を持たないで終わってしまいます。だから、クマに出会ったときにやられてしまうとか、そこでクマに対する知恵とか、あるいは、クマというのはこういう行動をする生き物だということをきちんと教えてあげる必要があると思えます。

それから、札幌が非常にすばらしいと思ったのは、それぞれのまちにまちづくりセンターがあります。多分、円山にもまちづくりセンターがあると思うのですけれども、そういうところとかなり太いパイプで連携して、動物園はまちづくりの拠点ですから、生物多様性としてのまちづくりを円山のまちづくりの柱にしていくべきではないかと思うのです。そういう意味で、市民ニーズをきちんとつかむという作業が必要ではないかと思えます。

もう一つは、社会的な役割としての動物園だと思いますけれども、きずついた動物を治療して自然に帰すということですね。これは素人ではできないことであって、やはり動物園でいつも動物に触れている人たちが、それぞれの知恵でそういう活動をやっていくべきであり、そのやり方を普及させていくということが必要だと思います。例えば、スズメが落ちているときに、そのスズメをどうしたらいいのかという知恵を授けていくのが動物園の任務ではないかと思えます。

社会的な役割というのは抽象的でなかなか絵にならないので飛ばします。

経営開発機能の二つ目は、投資と回収ということですが、私は基本的に、入場料だけで賄えている動物園は世界的にもないと思うのです。これは、まちづくり、環境教育あるいは環境学習の場として動物園が機能しているのであれば、その費用の負担はそれをつくっている市なりがかなりの負担を強いられるのは当然であると思うのと同時に、やはり動物園は市民によって支えられているのであれば、市民が経済的にも支える責務を負っていると考えるべきであろうと思うのです。

そういう意味では、これは円山地域の人たちだけが支えるのではなくて、今、アメリカなどの動物園のホームページを見てみますと、メンバーシップとか、寄附をするにはどうしたらいいかというものが必ずありまして、そこをたどっていくと、あなたはどの動物の里親になってくれますかという質問と同時に、里親になるには6,000円必要ですよと書いてあるのです。それで、EメールアドレスとVISAのカード番号を打ち込むのがぼんと出てきて、さあ、早く書き込んで送ってねというふうになっているわけです。

やはり、そういう寄附というか、メンバーシップをお金で買うわけです。ですから、私はこの子の里親になるためにお金を払うというようなギブ・アンド・テイクがあるのです。

それには必ず特典がついていて、一番おもしろい特典は、あなたはこの動物の里親になった誇りを持つことができるというものです。誇っていいよということです。それが見返りですということです。それから、その動物のポスターを送ってくれるとか、パック・ド・ヒストリーというこの子の履歴みたいなものですね。どういう動物なのかという特性とか、どこに生息しているというヒストリーを送ってくれるのです。それから、5人までは半額で連れてきてもいいよという入場料の特典もあって、家族何人だったら幾らとか、あなた1人だったらただとか、非常に細分化された費用の支払い方が書かれているわけです。

いわゆるメンバーシップといってもいろいろありまして、ただメンバーカードを見せればあなたはフリーで入れます、それは割安で、これだけお金を払えば買えますと。ここも年間パスポートがありまして、あれは1,000円で手に入るわけですが、アメリカだと1,000円で手に入るものはほとんどなくて、何千円からという感じのものが多いです。それがファミリーになると、すぐに1万円近くになるという感じですが。企業になると、何万円から始まって何十万円とか、いわゆる基金のファミリーになっていくという形になっています。

そのように、この動物園は私たちが成り立っているというような意識をつくり上げていくというところがあるのです。

この会員制度ですけれども、一番先に言いましたように、生物多様性とか環境学習ということテーマにしていくと、円山動物園でいう動物科学館の機能が非常に上手にできているようで、テキストブックもあれば、なるほどと思えるような展示もあります。動物科学館というかた苦しい名前ではなくて、もうちょっとニックネーム的な呼び方にして、生き物に関する子どもの科学館のようなものが大抵つくられています。そこにはパスポートを持っていくと自由に入出入りできるという形になっていまして、あなたは来るたびに賢くなるよみたいになっているわけです。

あとは、飼育動物の購入費ですが、何千万の寄附のうち、この分をこの動物の購入に充てたという報告がニュースで流れたりする。

それから、施設の補修整備費ですね。特に、ここはオオカミのところは1匹いなくなっでちょっと寂しいですけれども、あそこは大分荒れているのです。階段も崩れ落ちそうなので上ってはいけないと書いてありますが、確かに非常に老朽化が進んでいて危険な状態にあるという感じで、それもそういう費用の中で補修されていっているということです。

あとは、コストの削減については、例えば、今は上水を使っている率が多いと思いますけれども、中水というか、人間の飲み水にはできないような水を購入するとか、円山川の水をちょっと消毒して中水状態にして使うとか、それでも清掃用には十分だろうと思いますので、そうやってコストを浮かせていくという細かい積み上げが必要ではないかと思えます。

それから、今はどちらかというと、環境の保全と経済との循環サイクルをうまく成り立たせようというような運動をしていかなければしょうがない時代になってきています。例

えば電気を使うと石油をたくので窒素がふえるとか、そういう考え方になっていますので、それをたかないでどうするか、いわゆるエコシステムの効率性が今は考えられる時代に入ってきています。単純にコストを低くすればいいというだけの問題ではなさそうな気がいたします。

それから、動物との触れ合いの推進ということで、子どもにとっては動物をちょっとでもさわるのがとても気持ちいいのです。さわれるものなら何でもさわってしまうのですが、場合によっては危険なことがあります。かまれるということもありますが、もう一つは最近の感染ということもあるわけです。私が旭山でちょっと関心したのは、いろいろなところに手洗い機があるのです。動物をさわってもいいけれども、その後に手を洗ってねということで、いくつも蛇口がついているのです。あれは、環境教育という面ではなかなかいい方法だと思います。そういうふうに、動物はそんなに清潔なものであるわけではないということをきちんと教えてあげる必要があると思います。

それから、これは鳥のところではちょっと目につくのですが、羽が網にくっついてしまっているのです。鳥のふんはなかなかとれにくいので、それにまた羽がくっついてしまうとなかなかとれないということがあって、結構目立つのです。その辺は、ボランティアなり、ファミリークラブの日課の一つとして清掃するような仕組みづくりが必要ではないかと思っています。

それから、えさとなる植物の栽培のようなことも重要なのではないかと思うのです。近隣の人なり、動物園に来た人たちが、動物が食べるえさの種をまいていく、えさをやっていく、あるいは、それを刈りとってまとめていくといったサービスをここに来た人たちがやるようになると、この動物園は人々によって支えられている動物園になるというふうにも実感できるのではないかと思います。

私は、何かの形で奉仕するといいますか、日本では奉仕活動という言葉はなかなか言いにくいのですが、そういうものがないと、環境を子どもに学習させる、あるいは大人にとっても環境を学習する拠点づくりということが難しくなると思います。みんなお金がかかって、有償でだれかを雇わなければいけなくなるとやっていけなくなるのではないかと思うのです。

そこで、この前、像舎の前の手すりを青年がみんなで白く塗っていましたが、手塗りボランティア作業中みたいなものは大きく取り上げて、表彰でもしてしまうくらいにした方がいいと思います。私は、動物園は、たくさんの表彰状をうずたかく積んでおいて、それを片っ端から差し上げるというところになっていいのではないかと思うのです。そうしたときに、支えられている動物園なると思います。

このカードは、ファミリーになったからカードを得た、入場料を得たではなくて、私が支えている動物園という意識を育てることだと思うのです。

ここに上げたのは、実はここにジャック・ダニエルと書いてあるのですが、私は日本ジャック・ダニエルクラブの会長なのです。そうしたら、テネシーにある本社から賞状が来

まして、そのうち、いろいろなものが来たのです。それで、この前来たのは、これはディードと書いてあるのですけれども、地主の認証書なのです。あなたが来たら、あなたのロットを指定したから、そこでできる分のウイスキーを幾らでも飲めるよというものです。その土地はおれのものだというわけではないのですけれども、私はそういう地主になってしまっているのです。

わざわざ行ったことはないですけれども、なかなか立派な金ぴかのものが送られてきて、やっぱり送られてくるとうれしいのです。何にもならないけれども、うれしいというのが人の変なところだなという感じがします。

ですから、とにかく円山動物園もそういうものをたくさん用意するということが必要ではないかと思います。

それから、これは集客の対策ですけれども、さっき言いましたように、私がお姉ちゃんになってあげるといった形で動物とその子を結びつける、その努力をどのようにするかということが重要なかぎになると思うのです。

ただだから動物園に行くのではなくて、あの子に会いたいから行く、あの子の面倒を見にいきたいから行くといったような人間と動物の関係を作り上げていくなれば、生物の多様性の保全というのはおのずから維持していけるのではないかと思います。

ウェブサイトの抜本的な見直しというのも集客対策の一つです。

それから、これは旭山にあるシルバーシャトルです。私は見たことがないのでわかりませんが、電気自動車ですね。その停留所が立っていて、あそこも結構アップダウンがありますので、お年寄り結構大変なのです。

それで、私が考えるには、円山は、正門のところまでバスが来ますので、バスをおりたら、シャトルモビルを用意しておいて、車道に沿ってずっと上がって行って、一番南の山の上におろして、そこから正門の方へおりてくるという順路をお年寄り向けにつくってはどうかと思っております。

あとは、ファミリーカミングデーのような里親を一気に集める催しをして集客することですね。

また、事業計画の立案するのはいいのですが、必ずその評価をする必要がありますので、そういう仕組みをつくっておくと間違いないということがあると思います。

イベント計画については、生物多様性という中核を立てるわけですから、こんなに生物がいるのだと、種の数の多い動物園、それから飼っている動物の数の多い動物園としては、私が持っている書物では日本で5番目というランクに入っていました。今はどうかわかりませんが、円山動物園はかなり多いうちに入ると思います。大体1,000種類を越えるとかかなり多いと言われるわけですが、円山動物園は1,000を超えています。そういう意味で、生き物の資源確保という点では非常に高いランキングを保持していると思いますけれども、そんなにいたかなという感じで展示をしてしまうと、生物多様性というものの認識をしないで終わってしまうということがあると思います。私は、その辺はちょっ

と気をつけた方がいいなと思います。同じように見えても種類が違うとか、あるいは、種類は同じだけれども、これは亜種だよとか、そういうことをちゃんと教えてあげる必要があると思います。

参加型のイベントは、この前の夏休みには、工作の木工教室のようなものが開かれていたり、いろいろな絵の具で塗ったりするような教室が開かれていました。ああいうのはとてもいいと思いますけれども、生き物あるいは自然と密着したような題材を考える必要があるのではないかと思います。

いすのようなものをつくっていましたが、つくった子は、早速、それを芝生の上に持って行って、おれはこれに座って飯を食うみたいなことを言っていましたけれども、手づくりのもので、軽くて、それを持って動物園で座って飯を食うというのはなかなかいいのではないかと思います。ただ、もしやるのだったら、折りたたみで、布を張った軽いものをつくらせて、それならハイキングとか動物園などにくるくるとまいて持っていけるのではないかという感じもしました。何か動物園とかかわりを持たせたイベントがいいなという感じを持ちました。

それから、高齢者や障がい者に特化したイベントですね。この前、目の見えない子にさわらせるというようなこども動物園という催しをやりましたというお話を聞きましたけれども、そういうのはとてもいいと思います。その子にとっては、初めてそういう動物にさわったという経験は一生忘れないと思いますし、ふれあいというのは普通の人はどうやってできるわけですけれども、どうしてもできない人たちを集めてというのはとてもいいのではないかと思います。

周辺エリアの連携ということで、花盛りの円山公園でジンギスカンを食べて早く帰ろうというのではなくて、ジンギスカンを食べたなら動物園へ行こうというくらいのことであっていいのではないかと思いますけれども、ぜひとも円山公園と連結をしたい、エリアとしての連結をしたいと思っています。

スポーツグラウンドは、すごくにぎやかでいいのですけれども、駐車場のとり合いになる、道路が込んで困るということもあるわけです。ですから、この辺は折り合って、駐車場の増設みたいなことを共同でやらないと成り立たないのではないかと思いますし、この辺も周辺エリアの連携のプロジェクトであろうと思います。

それから、北海道神宮については、そのお祭りに動物が参加するというのもありではないかと思います。例えば、フクロウのお祭りがありません。それは余り関係ないかもしれませんが、動物に関連したお祭りがあるのではないかと思います。

それから、地下鉄駅からのアクセスということで、今は、円山公園の駅をおりても何も関係ないのです。本当にここに動物園があるのかという感じで知らん顔をしていますけれども、地下鉄ももっと頑張って、円山公園ここにありみたいなことを言ってもらわなければ困るなと思います。といたしますが、動物園がそれを言わせてやるくらいのことを行なわなければいけないのではないかという感じがします。

ここは、まさに動物園の駅だなという駅にしてしまえばいいと思うのです。子どもにとって、生き物がたくさんいて楽しいところだという雰囲気には駅自身を変えていく。それと同時に、動物園までの道には動物のマークを入れて、そのサイズがどんどん大きくなって、そのうちゾウも出てくればカバも出てくる。そういうマークづくりでも子どもをわくわくさせていくのではないかと思います。そういうつくり込みが足りないというか、今は何も感じないので、もったいないなと思います。

木道のところは、いろいろと工夫がされているようで、クイズをやったりというのはいいと思いますけれども、日常的に、この地域には動物がいるらしいくらいのことは、標識なり、文字はだめですね。絵文字の標識をつくるべしという感じがします。

それから、円山へのルートですが、これは円山の頂上から円山動物園へ下っていく山道になっているのですけれども、この先、この道は本当に動物園につながっているのだろうかかと非常に不安になります。頂上に一つ書いてあるだけで、途中から何の矢印もなくなってしまうのです。おり立ったところに動物園方面と書いてあるのですけれども、そこら辺に南口を設けてほしいと思います。無人の南口をどうやって設けるかということを考えていただきたいという気がします。

それから、緑のネットワークの拠点である動物園のイメージを動物園自身がつくる必要があります。一番高い南地区の方は木が余りなくなってしまって、もうちょっと先に行った動物園の縁に木があるのですが、人が歩くところは全然木がないのです。木のあるところまではたどり着けないようになってきているようなので、もうちょっと木の茂みの中に見え隠れするような、そういう歩き方ができる動物園であってほしいなという気がします。

それから、大倉山シャンツェについては、あそこまで上ってしまうと動物園も見えないので、なかなか連帯感が保てないという感じがしますけれども、やはり円山まで来たら、あそこのリフトくらいは乗ってもらった方がいいのではないかと、ルートマップの上では連携しているように表記して、来た人を退屈させないというような働きに協力をした方がいいのではないかと思います。

それから、生物と環境生態系というか、生物多様性の学習ですね。小学校の総合学習で環境の学習がありますので、それで学校から行ってきなさいと言われてきたような子どもたちがそろそろ歩いているわけですがけれども、総合学習などの学校教育と連携をするということですね。学校の先生を呼んで、動物園では何ができるかということをお話し合っカリキュラムをつくっていく必要があるのではないかと。そして、そのカリキュラムをホームページでどんどん公開して、ここに来たらこういう勉強ができるのだよということを予告してやるということが必要だと思います。

それから、これは新しくつくる水系のイメージですがけれども、昆虫とか子魚とかザリガニとかホタルの幼虫とかトンボの幼虫などがたくさんすむ谷川と、谷川に至る山の斜面ですね。動物園から川へ下るあたりの世界を子どもたちに分け入って触れさせるというようなゾーンをつくるといいのではないかと思います。そこで、何を大事にし、そこを守るに

はどうしたらいいかということを考えさせる、そういうカリキュラムが用意されている必要があると思います。

あとは、絶滅が危惧されているような希少動物をどうすればよいのか。これは、素人が考えてもなかなか思いつかないので、病院なり飼育員なりが、それはこうしたらよい、少なくともこうしたらよい、まだ実証されていないかもしれないけれども、こうした方がいいではないかというくらいの指針を動物園に訪れた人に対しては言ってあげないと、今はどうにしようがないという感じなのです。そのあたりは、動物園が意見を言うチャンスでもあり、そういう任務を負っていると私は思います。

飼育の研究は、彼らにえさをやったり洗ったりといった飼育の作業は大変ですということとはよく聞きますけれども、飼育の研究というのは大したことで、野生の研究にしにいかうと思ったら大変なことになります。ゾウを求めて探検家の格好して行ったところでゾウに会えるとは限らないわけですが、動物園には必ずゾウがいます。そういうゾウの特性とか、ゾウはどうしてこんなに数が減ってしまったのかとか、そういうことを記録したファクトシートと呼ばれているものがあります。いろいろな風土、気候に合った代表的な動物をちゃんと記述して、こういう動物で、どういう分布で、今、世界中に何頭いて、この特徴はどうで、食べ物はどうで、消化の仕方がどうでと、なかなか細かいことを書いてあるのです。それを印刷したものをファミリー会員にはちゃんと送りますと言っているわけです。これはプリントしたもののハードコピーですけれども、それを生態環境の中で体験させるというような仕組みをいろいろなプログラムをつくってやっていくというのが世界の動物園のやり方です。

日本では、そういうものは余り多くなくて、子どもの気を引くイベントはたくさん行われていますけれども、まじめな勉強、学習ということは余りなされていません。動物園の方は、動物に関しては学校の理科の先生以上の知識と経験を持っていますし、こうしたらこうなるということがよくわかっていますので、そういうものをきちっと体系的に教えていく必要があるのではないかと思います。そうじゃないと生物は滅びていく、私はそのような印象を最近持つに至っております。では、どうするのだということになるとさっぱりわかりませんが、とにかく生物と触れ合うということが最初の一步ではないかと思うのです。

ここに上げたのは、ケージの清掃となっていますけれども、清掃というのはどういうことかということ、このオオワシの気高さみたいなものとこの網がそぐわない感じがするのです。エンリッチメントというか、このワシにそぐう環境づくりですね。オオワシはここを清掃できないので、我々というか、ボランティアなり何なりがこういうところをきれいにしてやる必要があるのではないかという感じがします。

それから、生態研究機能ということでは、動物園は今まで動物を見せることに一生懸命になってきましたけれども、やはり生物多様性の核としての動物園ということになりますと、生態的な環境の中での生き物という研究が必要なのではないかという気がするのです。

ここでは、あえて観光マーケットとのジョイントと書いていますけれども、まさに団体をどっと送り込んでくる化石探検というイベントをつくればそうなるという形です。これは、エンターテイメント的なイベントとしてはいいと思いますけれども、それと同時に、一方では、飼育というような世界を広報に載せていけるようなコンテンツを飼育員なり科学館なりの職員がつくる努力をしていく必要があるのではないかと。飼育員の体験というのは、すべてが貴重な資料、データですから、それをどうやって活字にしていくかという努力をしていかなければいけないと思うのです。それが新しい発見であれば、学術的な研究ということになってきますが、そこまでいなくても、一般の人は全然知らない世界なのですから、一般の人に知らしめるメディアを動物園は生んでいく必要があると思います。

それから、生態研究機能の一環としての動物病院です。これは、時々公開するのです。この前、新聞に出ていましたけれども、麻酔はこうやって打つよという吹矢の吹き方などから一つ一つ、野生の生物を救うにはどうしたらいいのか。動物は言葉を持っていないので、こういうことをやっていくということを見せていく必要があります。強そうな動物も環境に負けてこうなってしまうのだとか、そういった世界に対して同情したり、心配したり、私ならこうしてあげるといった気持ちを持ったり、それが非常に大事で、生き物と人とのかわりを生み出していくことになると思うのです。

最後になりますけれども、サービス機能というものがあります。

サービス機能という意味では、園内のゾーニングを新しく設計すべきであろうということと、ルートですね。人の歩き方というルートの展開を新しくすべきだろうと思います。

二つ目は、産・官・学・市民の連携ということで、私は市民に支えられた動物園をつくり出していくためには、市民との意見交換というか、市民の意見を受け入れる場をつくらなければいけないのではないかと気がするのです。毎月なのか、シーズンに1回でいいのかわかりませんが、市民とのディスカッションというか、こうしてほしいとか、ああしてほしいというようなニーズを聞いて、その中でできることはやっていくということが必要なのではないかと思います。これは、アンケートではなかなか答えられない世界でもあるというふうに私は思いますので、フェース・ツー・フェースのミーティング、あるいは食事会でもいいと思いますけれども、そういう会合を開いて、この地域、このエリアを支えている市民の声をどのように動物園に反映させていけばいいのかという仕組みを考えていくべきであろうと思います。

それから、ここが生物多様性の保全のための拠点というからには、これだけは新しくやるのだというようなワークをつくり出していく必要があるだろうと思います。まだ具体的にこれだというものはないのですが、サービス施設運営の面から、キッドランドをどうするかという問題が一つあります。例えば、どうしても必要なもので、こういう回転ゴンドラのようなものが結構回っていますので、これについては、動物園から切り離して、円山公園施設という形での施設移転をしてはどうか。あるいは、縮小した形で円山動物園の中に幾つかの遊具を残して、ほとんど開店休業しているものも多いので、そういうものは撤

去してエリアを限定していく、狭めていくということを図るべきであろうと思います。

例えば、これは私が行ったときは動いていませんでした。今は動いているかもしれませんが、動いていませんでした。

それから、白鳥池はこんな状態です。これは写真の方がきれいかもしれませんが、とにかく、背景にいろいろな遊具が見えてしまうので、目がそっちへ飛んでしまうという感じがするのですが、ここに置いておくのであればもうちょっと木を多くして、入り口をもうちょっと開放的にした方がいいと思います。それから、水鳥が飛んでいってしまわないように上を網で覆っていますが、もうちょっと高い網で、黒い色の細いネットで網をかけると余り気がつかないのではないかと思います。今のネットは見え過ぎて気になるという感じがします。

それから、斜面の頂上にレストランをつくりたいということで、この写真は非常に不思議なレストランです。そんなに贅沢につくる必要は全然ないと思いますが、この味はどこにも負けないというものを一品くらいは用意してほしいという感じがします。

それから、オリジナルグッズですね。これは売店のグッズですけれども、ここに上げたものは木のズーというおもちゃです。白木の木製のおもちゃで、簡単に動物の格好に切り抜いただけですけれども、これは素朴でいいなと思います。実は、大学の先生の作品なのですが、なかなか人気があるようで、今は種類がどんどんふえてきているようです。

やはり、円山動物園でしか売っていないようなものをもうちょっとふやして、いいおもちゃをちゃんとそろえて売るべきではないかと思います。どこでも売っているようなものを置く売店は撤去した方がいいのではないかと思います。そもそも、大人の買うものが余りないので、円山動物園に来たから、お土産として何か買って帰ってやろうというときに選ぶものがない、これが現実だと思います。

だらだらとした説明でお聞き苦しかったかもしれませんが、これは、私の頭の中で作り上げられたものではなくて、リスタート委員会のいろいろなご意見とか、大学のワーキンググループの方々の意見とか、学生の意見とか、いろいろ織りまぜて、こんなふうな改善をしてみてもどうか、こういう機能も備わせてみたらどうかということを考えてみました。

今の構造は、大まかに1から18の具備すべき要素を考えまして、これは課題と解決策の中から代表的なものを取り上げたのですが、縦軸と横軸に同じものを置きまして、縦軸のこの要素が横軸のこの要素にどれだけ影響を受けているのかということをも全部点数にしてみました。

これはデマテルという手法なのですが、オイルショックのときにローマ会議というものが開かれまして、そこで対策を検討したときに、いろいろな要件があって、エネルギーの涸渇を防ぐためには、どういう仕組みで世界が協力すればいいのか、その構造を探り出すためにつくられた方法論が、デシジョンメイキングトライアルエバリエーションラボラトリーという手法です。それを、スイスのバツテルインスティートというところがつくり出

した構造化モデリングという手法を使って、えいとコンピューターにかけたら、こういう図が出てきました。

影響の強い要因は、まず情報系のウェブとコンテンツです。それから、人と動物のかかわりの推進という要因が非常に強いです。それから、会員を維持するイベントというものが非常に強いです。また、サポーターの寄附とか、マーケティングとか、もちろん展示システムも魅力度を増す要因ですし、施設のアイデア設計とか、エリア連携とか、そういうものが非常に強い要因になって、こういうものに影響を与えるのは、研究の連携とか、園内のコミュニケーションシステムとか、施設の運営とか、安全法制というのは、周りが余り影響を受けない、しかし影響を与えているというふうに読んでいくのです。この辺は影響力の非常に強い要因が集まっているところで、そういうものが種の保存というものを考慮し、飼育の研究というものも育てて、最終的には収益の研究に至るということです。これは、一番影響を受けた結果、こういうものが得られるという仕組みで、これは矢印つきのグラフになっているわけです。

これで見ますと、ウェブ、会員維持イベント、施設のアイデア設計、サポーター・寄附者管理、マーケティング、展示システム、広報といった内容が、これから非常に重要な要素なり、生物多様性の拠点を支える、あるいは拠点をつくり上げる要因になっていって、その結果、最終的には収益計画につながっていくだろうという構造が大まかに見えたということです。

そして、ちょっと暴力的ですが、今のデータがどのような類似度を持ってつながっているのかという解析をしてみました。そうすると、情報・デザイン機能、生物の持続的利用機能、自然とのふれあい資源機能、環境学習機能、生物保護・再生機能、研究サービス機能というふうにとまとめられまして、これが先ほどの紫色で六つくらい出てきたクラスターの大もとになるわけです。そして、この上に生物多様性・環境形成拠点というものが位置して、それをつないでいくものとしてこういうタスク作業がそういうものを支えていきますということをお知らせしております。

今までいろいろな意見が出てきた結果を取りまとめて、その関係に点数を与えてコンピューター解析をした結果、私が先ほど動かしていたクラスター図ができ上がったということでございます。

現在の配置図は、モンキーはここ、チンパンジーはここ、オオカミはここ、フクロウとタカはここ、タスマニアのカンガルー系の動物はここ、リスザルはここというふうに、動物別にどんどん建物がふえてきたわけですが、これをそろそろゾーン別に置きかえてはどうかというのが私の提案でございます。

ゾーンに置きかえる意味というのは、地域で分けるよりも、風土・気候で分けるということです。つまり、ここには鳥もいたり、魚もいたり、昆虫もいたり、猛獣もいたりというゾーンをつくり上げていくということです。ここを幾つか仕切っていけば、それが共存しているように見えるという仕組みの世界をつくっていくと、子どもも、ライオンはこう

いうほかの動物と一緒に暮らしているのだということを理解していくようになります。そういう風土・気候で切って行って、困って、そこに異種の動物を入れる、あるいは、その生息環境に似た植物を入れる、そのものがなければ似た植物を入れ込んでいく、土とか砂とか岩もそれを模して入れて行って動物が歩きやすくするという形にしてはどうかと考えております。

新しくつくるものとしては、左側の谷のふれあい水系ゾーンを新しく開発する。それから、南門をつくり、そこに新しいレストランをつくる。それから、ちょうど中核に当たるあたりに新しいカフェゾーンをつくる。

水系については、白鳥池をやめて、ふれあいゾーンをつくるということです。ふれあいゾーンでは、子どもはそこにいる生き物は何でもさわっていいと。そういう生き物をたくさん集めて、草木も植えて、水も流して、子どもが水の中をばちゃばちゃ入っていくというような状況をつくりたいと考えているわけです。

ですから、基礎的なゾーンは四つか五つくらいにして、北海道独特の、あるいは北方系の寒いところにすむ動物は冷温帯ゾーンに大体まとめて置いて、北海道でよく見る動物は大体ここにいるとか、北海道でひっそり生きている動物をここに集める。

私も、よく知らないものですから、北海道特有の鳥などは名前を見てもわからないのです。やはり、知らないものは、こういう呼び名の生物だということを子どもに教えてやる任務があると思うのです。そういう意味で、有名な動物だから置く、人気があるから置くのではなくて、北海道に住んでいる者はこういう生物は知らなければいけないというものを冷温帯ゾーンに集結させるということが必要なのではないかと。

それから、さっき言ったシャトルムーバーは、正門からこの道をずっと上がって南門まで行って、お年寄りや身障者をおろして、またここに戻ってくる。そして、ここでバスに載せて、またここから行くといったような往復をしてはどうかと思います。

ここはバス道でしょうか。

金澤園長　そうです。

原田委員長　何分くらいの間隔ですか。

金澤園長　15分に1回くらいです。

原田委員長　15分なら、シャトルを走らせることもないのかな。バスに乗せてしまえばいいのでしょうか。ちょっとわかりませんが、ここを往復させるということが必要だと思います。ですから、元気な人はここから上がっておりという見方で、ちょっと疲れるなという人は上から片道で回遊して下へおりるという見方を用意するということがございます。

一人で長々と話してしまいまして、申しわけありませんでした。

そういうことで、私の動物園のリスタートのイメージとして、ほぼこのようなことを考えているということを申し上げさせていただきました。どこまで、どの期間で、どのような順序でやっていけばいいかということについては、これから9月末までに少し具体

的に考えていきたいと思っております。そんなにばたばたどんどん変わっていくものでもないだろうということはよくわかっておりますが、やはり大きなチェンジをしながら部分的に改造していくということが現実的な方法ではないか。

そういう意味では、親水ゾーンに関しては割と具体的に手がつけられるのではないかと思います。そんなに施設を必要としません。道をつけるということは必要かもしれませんが、小さな川ですから、そんなに長い橋ではなくても、ちょっとした橋をつけて行ったり来たりできるようにするような仕組みをつくらなければいけないと思います。ふれあい水系ゾーンは最初から手がつけられるかもしれないと思っているところでございます。

以上でございます。

ご清聴、ありがとうございました。

金澤園長 2時間以上たちますので、ここで少し休憩を入れてはどうでしょうか。

原田委員長 それでは、10分くらい休憩をとりたいと思います。

#### [ 休 憩 ]

原田委員長 それでは、きょうの議題である課題の抽出と改善策について、いろいろとご意見をいただきたいと思っております。

きょうのアンケートの結果、それから、ただいま中間的な構想をご提案いたしましたけれども、これはまだ固まったものでも何でもございませんので、そうではなくてこうであるとか、そういうご意見でも結構でございます。あるいは、全く新たにこういうふうを考えてはどうかというご提案でも結構でございますので、ご意見等をいただければと思います。

話のとっかかりとして、先ほどこれについてご説明をしましたが、最後にこれが1枚ついております。

さっき画面でいろいろ動かしておりましたのは、このデザイン機能、2番目に展示企画機能、3番目に経営開発機能、4番目に環境教育機能、5番目に生物研究機能、6番目にサービス機能といったように大きく六つのクラスターに課題と解決策がまとめられるだろうという解析結果をもとにご説明をいたしました。この辺に書いてあるキーワード、あるいはこの6項目ということでも結構でございますので、それぞれのお立場からご意見をいただければと思います。

動物園の役割というか、基本的な機能ということについて、前回もいろいろとご意見をいただきましたけれども、今回は、どちらかということと生物多様性の保全というような観点から新しい円山動物園の軸をつくっていったらどうかということをおし上げたつもりでございます。しかし、市民の意見としては、子どもの情操教育が一番というふうに出ておりますし、必ずしも環境保全的な軸がこのアンケートの回答者の答えではないので、ずれているのではないかとご意見もあろうかと思っております。その辺から入っていただいても

結構でございます。

いかがでしょうか。

笠委員 あくまでも私の意見ですけれども、ここまでインプットを大量に入れられてしまうと、答えようがないというのが正直なところですよ。私は前回出られなかったのですけれども、この委員会のあり方として、もうちょっとフリーのディスカッションで積み上げた上で方向性を出すのかと思っていたのですが、ここまで委員長の方で案を出されてしまうと、正直言って、これ以外のことを何か言ってみると言われても出てこないです。ですから、フリーの話というのをもうちょっとやるべきではなかったでしょうか。

きょうのお話を聞いていても、確かにおっしゃるのはわかるのですけれども、ここまで大量の情報を入れられて、あとは何か足りないことがあるかと言われても、正直言って無理ですよ。

服部委員 きょう委員長の方でいろいろ提起していただいた問題は、前回などに皆さん方から出てきていた内容に沿った示し方ではなかったかなと思います。

笠委員 これは、骨組み自体は本当に文句のつけようがありません。ただ、きょうも5時までであるからかなりディスカッションの時間があるのかなと思って、自分なりにはいろいろやってきたのですけれども、ここまで大量の情報を入れられてしまうと、正直言って答えようがなくなってしまうと思います。

原田委員長 さっきも申し上げましたが、これは全く結論ではありません。これをごらんになってもおわかりになりますように、よく読んでいきますと、かなりばらばらで、本当にこの場所でいいのかということもありますし、これで網羅しているのかというところがたくさんございます。これは全く一つの考えということですから、これに沿ってという必要もございませんし、軸立ての仕方としましても、情操教育という柱で子どものための動物園というところを強化していくのが円山のあり方ではないかという考え方もあると思うのです。なぜこれでなければならぬのかということは一切ありません。

笠委員 もう一つは、このニュースウィークを見ていたのですが、世界の動きと今の旭山動物園の動きというのは全く違う動きをしています。では、今、円山がこういう方向に、もちろん生物多様性というのは世界的な動きなのだけれども、今の日本の動物園でそこまでいっているところはないと思うのです。ですから、そのギャップを考えたときに、もちろん、これは本筋なので大もとはそこに置いてもいいと思いますが、今の段階的な計画としてはそこにいきなりつないでいいのだろうかと思っていたのです。この余りにもすばらしい内容を見てしまうと、果たして今の円山との差というのは何だろうと思ってしまいます。ですから、これを本当に動物園像として掲げてしまっているのかどうか、日本の動物園、あるいは円山動物園としていいのかどうかという疑問があります。今の段階では、まだそこまで行っていないのではないかと思います。

円山動物園を全く新たにつくるのであればできるのですが、今の現実を考えたときに、今のゾーニングの話も、私もプランニングをする人間ですからわかるのですけれども、今

ある施設をジグソーパズルのように組みかえていくということは現実的に不可能です。その中で、ステップとしてはどこまでいけるのかということを実際に落としていかないと、予算的な問題とか、年次計画とか、そういうことであってもなかなか難しいだろうと思います。その辺の現実の落としどころのようなものを考えるのか、あるいは、本当の50年計画くらいのプランとしてこれを考えるのかということがよくわからなかったのです。

服部委員 それは大変大事なことだと思います。いずれにしても、再生ですから、あくまでも長期的な展望でどうするのか、短期的にはどうするのか、中期的にはどのように描いていくのかというのはつくり上げていかなければいけないと思います。ただ、緊急性のある課題としては、やはり収益が取れていない、お客様が集まっていない、この問題を克服していかなければいけないので、どうしても魅力あるものをつくっていかなければいけない。それで、魅力あるものとするれば、円山でなければなし得ない動物園に再生していくべきだろうと思います。旭山と同じようなレベルに持っていくということは必要ないだろうと思いますし、円山は円山らしいものを持っています。そういう意味で、円山動物公園という一つのコンセプトが描かれましたが、円山動物公園としての地域との連携というのは欠かすことのできないことであって、その辺のコンセプトをしっかりと押さえた上でディスカッションしていく必要があるのかなという感じがします。

私は、動物公園としての再生というのは、大変いいポイントでおつくりになられたなどに関心しております。

原田委員長 最初にご指摘がありましたように、この計画を一気にやろうと思ったら、新規動物園であれば成り立つかもしれないというのはわかりますし、全部壊してこうすることは今できるわけがないという感じも確かにします。ただ、円山動物園が今何をしなければいけないかという、まず長期的な目標を立てることが大事であって、その目標に向けて一つずつ、どういうロードマップをつくっていけばいいのか、そこに至る道筋をどうつけばいいのかということを決めていかなければならないのだと思うのです。

ですから、私の考えでは、これは10年くらいの長期スパンでどこまでできるかなというふうに考えているわけです。その半分の5年後に一体何ができているか、それは、私がここで言うております多様性の保全のための拠点の一画が5年後にやっと姿をあらわすのかなという感じがしています。ただ、子どものためのふれあい動物園をつくるよといっても、一体どうすればいいのかということについて目標がないと、どういうふれあい動物園をつくっていいのか、子ども動物園なのだけれども、どうすればいいのかもわからないので、かなり理念的なことをまずは長期的なゴールに据えて、それに向けて来年は実際にどこから手をつけばいいのかというプログラムがこれから段階的に組まれていくことになると思います。

10年後に今の円山動物園が抱えている環境と同じようになっているかどうかというのはだれにもわからないわけで、現在の環境はこうだけれども、5年後にどういう環境になるかはわかりませんし、10年後にどういう環境になるかわかりません。ただ、動物園は、

今やアクティブに動こうとしているわけで、動くためには先に石を放っておかないと、目標を決めておかないと、そっちの方向に足が向かないわけです。

そういう意味で、これは、世界がこういっているからこれをやるということではなくて、世界の動きはこういうふうにいっている、動物園も長期的にはそういう方向を目指すけれども、来年やれることはこれくらいのことで、3年目にこのくらいのことができて、5年後くらいにこれくらいを達成して、7年目にはこれくらいをやって、10年目にはこれくらいのことができているであろうという道筋を段階的につくっていかないと、多分、できないのではないかと思うのです。

3年くらいで完結するような目標ですと、その先はどうするのかというと、またリスタートをかけなければいけない、常にリスタートをかけていなければいけないということになるわけです。例えば、地域開発などはほとんどそうですけれども、10年とか8年とか、かなり長期の計画を立てておいて、5年間くらいでこういう計画をやりますという5年間の実行計画をつくって、1年目にはここまで進めようというものをつくって、少しずつやっていって8年目にこれを達成するという形でやっているわけです。

私は、一番長いものは20年くらいかけてやったわけですが、こんなものはできるわけではないんじゃないかとみんな思ったわけです。けれども、市長が強い意思を持って、20年くらいかけてやるものにしか市はお金を使いたくないと。3年くらいでやるものだったら、また次にやることを考えなければいけないではないか、そのときにまた目標、ゴールをつくるのかという話が出てきたわけです。それで、まず長期的にゴールをつくっておいて、そこに至るまでにはいろいろな道があるかもしれないけれども、この円山動物園がやれる道、進める道を一步步歩いていけば、そのゴールに少しずつ近づいていけるのではないか。それが10年目に達成できなかったとすれば、それを少し改変して、次の10年、あるいは次の5年計画で達成するということがつぎ足されるというような仕組みでやっていけばいいのではないかと思うのです。

今、世界的に有名な動物園がこういうことをやっているから円山がやるというのではなくて、そういう趨勢にあると、日本もその趨勢に乗らざるを得ないところにきている。では、どこがやるのかというと、学校の理科の教師がやるわけではないでしょうと私は思うのです。大学の専門の人たちだけが研究をするものでもないでしょうと。生物というのは人間と共生しているわけで、だれでも何か飼っている、何かを食べている、生物と人がいつもかかわっているわけであって、生物というのはそれを実感している対象なのです。植物もそうですし、何でもそうなのです。

そうだとすれば、それに対して我々はどう一步を踏み出せばいいのかというあたりは、我々自身が考えてもできませんし、市民一人一人が自身で幾ら考えてもどうにもできない、それを考えている緑と水と生き物、こういうものを考えている動物園、山、川のある環境、そういうものがここに整っているではないかというところで大きな長期目標を考えて、そこでまず一步を踏み出していくと。その一步といってもどれくらいの年数がかかるかわか

りませんが、そのあたりを具体的に実行計画をつくる 実行計画ですから、構想段階では、それがどれくらいのステップで、どのように接近していけるのかというあたりをしなければいけないと思います。ただ、それは計画案であって、実際に予算がつかなければ話が始まらないではないかということもそのうち出てくるかもしれませんが、それは来年の仕事になるかもしれないと思います。

いずれにしても、ゴールを定めないと、どっちに走っていいかわからないということなわけですから、そのゴールとして幾つかの選択肢が用意されていて、市民の声も聞いた、子どもの情操教育としての動物園のあり方が第一であるという方向も出てきている、それからもう一つは、レクリエーションの場、憩いの場として動物園をもう一度見直してほしいという意見も片方では出てきています。娯楽の場所として考え直してほしいという意見も出てきています。三つ目には、環境学習、環境の保全といったような方向性が出てきています。

ただ、今は出てきているだけで、委員会としては、私がきょう言ったのは、生物多様性、環境拠点としてあるのではないかという方向を出ただけで、これは何も結論ではないのです。ですから、今はそういう幾つかの意見が出てきているという段階だと思います。この意見について、この委員会で、こういう方向でいくべきではないかという意見を交わして、その方向性をここで決定していく必要があるのではないかと考えているのです。

その方向性というのが何も出てきていないところでは、いろいろな意見を言ってもみんなばらばらで、どうしようもないだろうと思うのです。今までいろいろな意見を交わしてきているわけで、ただ、そんなにばらばらではなくて、ある程度そういう方向に来ているのではないかという実感を持って、まとめたわけではありませんけれども、私のかなり個人的な考えをご紹介します。ですから、これに全然縛られることなくご意見をいただきたいと思っています。

笠委員 一つ質問ですが、市民アンケートというのは、あくまでもランダムな聞き取りですね。来園者に対してではなくて、あくまでも市民ですね。ですから、この結果を見ていて最初に思ったのは、娯楽的なものというのは、実際に来た人と違うのではないかという意識があるのです。ふだん、動物園に余り来ない人にとっては、動物園というのは情操教育というのが圧倒的に多いとなっているけれども、実際にここに来ている人はちょっと違うのではないかと思うのです。特に、連休とか夏休みなどに来ている人というのは、ある意味でレジャーの場として来ているわけですから、その辺のずれというのは気をつけなければいけないのではないかという印象を持っていました。

来園者のアンケートは、前にいただいたものしかないのですね。

その辺の建て前と本音がいろいろあるのかなと思ったのです。

それからもう一つお聞きしたかったのは、動物園というのは、あくまでも円山公園の中に入っている施設ですね。その施設というのはどういう位置づけになっているのですか。円山公園の中の占用ではないですね。一つの有料施設として動物園があるということなの

ですか。

金澤園長 そういうことです。

笠委員 そうすると、球場や競技場と全く同じレベルであるということですか。

事務局 歴史的には、公園施設の位置づけの中から分化していったということだと思います。例えば球場とか陸上競技場は、もともとはここが道内の総本家のような位置づけだったのですが、今は厚別の方が陸上競技場としては1級の格式になって、ここは2級ということがあります。野球場も、札幌ドームができて、前はプロ野球もここでやるのが当然で、道内でジャイアンツが毎年来る唯一の球場だったのですが、今はそうではないです。

笠委員 管理は別なのですね。

事務局 管理は、市役所の側の事情で完全にばらばらに分かれています。そこですと、もとは教育委員会体育部だったのですが、今は教育委員会から分かれたスポーツ部というところでやっています。

金澤園長 ですから、スポーツ系のところは公園の面積から外れているのです。

笠委員 そうなのですか。

事務局 都市計画決定上の公園の位置づけにはなっていますが、用途としては二重に……。

金澤園長 簡単に言うと、所有権は違う存在があるということですか。同じ札幌市ですけどもね。

笠委員 そういうふうになっているのですか。

金澤園長 けれども、動物園は公園の中の施設です。

笠委員 要するに、円山公園という一つのエリアの管理の中に入っていると思っていたのです。その中に動物園があり、球場があり、役割分担とかアプローチをきれいにするとするのは神宮さんと話をしなければならぬけれども、あとは内部の話かと思っていたのです。そういうことではないのですね。

金澤園長 はい。

笠委員 では、駐車場についても、あくまで球場も動物園も使えるけれども、場所は動物園の中にあるということですね。

金澤園長 そういうことです。それは、私が来たときもわからなかったのです。

笠委員 神宮を含めるかどうかは別としても、市の中で一つの協議会をつくるのも変な話ですが、一体として役割分担をしてアプローチをどうしてなどという話は全然できないのですか。

金澤園長 それはできます。今まではないですが、今は、このリスタートのための内部プロジェクトがありまして、その中にはスポーツも入っています。神宮は入っていませんけれども、スポーツと緑化と動物園がセットでここをどうするという議論をしています。また、道路関係もみんな入れています。

笠委員 ここである程度の方向性を出したら、市の内部でちゃんと調整をして答えが出

てくるということになるのです。その辺で、色が違うし、変だなと思っていたのです。

服部委員 円山動物園をどうするのだということで円山動物園だけをとらえてしまうと、非常に危険性が出てくるということですね。そういう意味で、動物公園というあり方、コンセプトというのは、先ほどおっしゃっていた環境グリーンベルトの一環として位置づけられて、そういうマクロ的な見方をしていくというのは非常に大事な話になっていくかなと思います。

山本委員 まず、基本的なスタンスとして賛成です。

私の立場で言うと、今、私は北海道の観光審議会とか、札幌市の路面電車の検討会議とか、読売新聞のまちプロジェクトの委員とか、三、四年前からこの辺のことをやっています。つい先日は、札幌の中に道の駅をつくらうというものにも入ってしまいまして、この手の話があちこちでなされていて、その度合いがどんどん強くなっているなと感じます。

その中で、皆さんも同じような仕事をなさってここにいらっしゃっていると思いますけれども、点だけで考えていたら、はっきり言って話になりません。これは、住んでいる我々もつまらないし、行く気がしません。外から入ってこられる方も同様で、そんなことをしていたら収益性が悪いし、効率が悪いです。札幌というのは、ちょっと引いてみると、北海道の中では大都市ですけども、札幌だけを見ると、(先週)金曜日に八つに分けたらどうだという話があったのですが、私はそんなに多くなくて四つくらいではないかと個人的に思っているのです。ただ、円山のエリアはその四つの中に必ず入るところで、とても特徴があるところだと思うのです。

ですから、まずエリアとして考えるというのは、第1回目、第2回目ともに皆さんからご意見が出ましたが、もうマストだろうなと思うのです。それで、先生は10年とおっしゃったけれども、できればもうちょっと早くそこまでたどり着きたいなというのが私の本音です。

いずれにしても、市で何かをするときに、飼育員の方は専門度が高いから別だと思うのですけれども、ここにいる人たちは2年で交代するというのがまず大問題なのです。こんなにまじめに全員そろっているけれども、もしかしたらもういないかもしれない人たちに向かって何だかんだ言っているてもむなしくなるときがあるので、こら辺の半分くらい残ってねということも、ひょっとしたらここに1行書いておかなければいけないのかもしれない。

今、市の側の体制の問題とおっしゃったけれども、それはいろいろな側面でありますので、そこはちょっと気になるなと思っています。

いずれにせよ、私は10年ではなくて、できれば7年くらいでゴールで、来年できることを3年、5年、7年くらいでできるのではないかと考えています。夢は大きい方がやる気が出るので、私はビジョンは結構壮大なものでいいと思うのです。ただ、分解してみると、割と手近なところで言えば、やはり人がふえなければお金が落ちないので、このことをどうするのかということと、むだは廃するけれども、本当に必要なことには投資してい

くのだという見きわめをまずここで早くするというのが大事かなと思っています。

きくち委員 私も、今、山本委員がおっしゃったのと同じようなことを考えていました。言い方はとてもしんらつですが、何となくここは市役所別館のようなイメージがすごくありまして、この話を最初に持ってきてくださったときに、今は大変な時期に大変な役割を担ってしまったのだよねというエネルギーがすごく伝わってきました。だからこそ、その大変なことのために何か一緒にできたらいいなと思ったのですが、その成り立ちが終わったときにはいらっしゃらないのかなと思ったら、えっと思いました。

私は企業を運営していますけれども、企業を運営していくときには、それぞれ企業努力をしていて、お金がないときはまず最初に何をしていくかといったら、社員なりの意思疎通と、何をしたいかというコンセンサスをとっていくのだと思うのです。しかし、私はきょう、ここで昼食をとったのですが、食堂の方々が本当に人を招き入れたいのかと思ったのと、帰りにお会いした飼育員の方々のお客様に対する態度にもクエスチョンマークがついたのです。もしかしたら、上層部の人たちだけが円山動物園を何とかしようと思っていて、そうではない人たちは、新しいことに取り組むのは面倒くさいし、おっくうだな、何でこんなことになってしまったんだよというエネルギーがいっぱいあるような気がしてならないのです。

いろいろな建物を建てて構想していくのは当然のことだと思います。改革する中で、そういう案が上がって当たり前だと思うのですけれども、みんながもっと盛り上げようというエネルギーを出している動物園にまずしてもらいたいということを感じました。

本当に頑張っていると思います。つい最近のいろいろな広報誌を見ても、テレビのニュースを見ても、円山動物園ではこういうことをしていますという情報は、今、私がこういうことにかかわったからそう感じるのかもしれませんが、とても多く入ってきているように思います。その中で、チンパンジーのディナータイムも拝見させていただきました。でも、私に言わせていただくと、せっかくやっているのだから、もっとそれをアピールしたらいいのになとか、まだまだ足りないのではないかなということを感じましたので、差し当たってできることとして、ここにいるすべての、掃除の方から、食堂の方から、飼育の方から、みんなで盛り上げるという気持ちを見せていただけたらいいなと思います。

金澤園長 ちょっといいですか。

言いわけではないのですが、実は、私が春に来たときから見ると、これでも大分よくなったのです。この動物園にかかわっている人は、ボランティアの人も食堂の人も含めて約200人います。それで、市の職員は40人なのです。今、市の職員の意識も変えなければいけない、それから、かわりのある200人みんなの意識も変えなければいけないということで取り組んでいる真っ最中ですが、私が4月に来た時点から見ると、少しはよくなったかなと思います。

ただ、今、きくち委員や山本委員から言われましたけれども、正直言って、まだまだだめなのです。そこは、もう少し時間をいただければよくできるかなと思っています。

それから、情報の発信としては、昨年から比べると数段ふえました。というのは、去年は広報さっぼろだけなのです。今は大分取り上げていただいています、私たちの目標は最低週1回は取り上げてもらおうということで、今、露出するように頑張っていますから、相当変わってきています。また、このリスタート委員会が大分取り上げられたことによって、反応も大分変わってきたということがありまして、今は、動物園はおそろしいくらい注目されていて、かつ、ちょっと持ち上げられている時代かなと思います。これでちょっとどじを踏んだら、ふっと手を離されるのではないかという心配をしているくらいで、大分変わりつつあります。

また、職員については、組織ですから、はっきり申し上げていい者と悪い者がいます。今、いい者をどんどん伸ばそうということで努力しています。悪い者はどうしようかと悩んでいるところです。そういうところは、当然、民間企業と同じように、きちんと手当てをしていこうと思いつつやっています。

今、お二人から出たところについては、非常に耳が痛いなと思っています。正直言って、2年で異動するという事はあるので、ちょっと困ったなと思っています。ここの最終的な計画部に異動させないと書かれたらどうしようかなと思っています。

それとは別件ですが、きょう欠席されている岡田委員から事前にファクスをいただいていますので、簡単に報告させていただきたいと思います。

5点あります。

1点目は、先ほど委員長のプレゼンの中にもありましたが、園内にもっと緑をふやして、円山の森の中に動物たちがいるイメージをつくり出してほしい。そして、円山全体と動物園が緑の回廊でつながって、野生のエゾリスやシマリス、野鳥が園内でもたくさん見られるといいと思います。

2点目は、前回、門のところに散歩途中にもふらっと寄れるようなレストランをという話が出ていましたが、すごくいいと思います。できれば、メニューを動物のえさになるのと同じ食材を使って組み立ててはどうでしょうか。また、売上の一部をえさ代に充てるなどするともっといいかなと。

3点目は、前回、資料で2004年の来園者の満足度調査というものを出したのですが、それを見て、地下鉄派が少ないのが意外でした。駐車場の拡充が難しいことを考えると、地下鉄利用をふやす方法も必要ではないか。また、地下鉄代と入園料、それからレストランができたとすれば飲食代がセットになったお得な券の発売など、地下鉄からのアプローチ、それから駅から園内の獣舎まで動物の足跡を追いかけて入ってこれるような仕掛けが必要ですねというご意見です。

4点目は、カラス対策についてです。前回、カラス対策で駆除したらというご意見がありまして、それに対してですが、動物が人間にとって有害か無害かという尺度ではなく、その動物が生態系でどのような役割を果たしている、そこにいることによってどんな影響を与えているのかという視点をもたらせてくれるのが動物園だと思います。カラスの古巣

を利用してチゴハヤブサが営巣をしていることを考えると、苦情があったとしても、安易に駆除はしてほしくないです。その分、屋内の飲食スペースをふやすとか、ごみの分別を徹底するとか、子育ての時期には注意を喚起するとか、人間とカラスがうまく共存できる方法を考えていただければいいと思います。

それから、5点目は感想ですが、夏休みの夜間開園に来ました。は虫類館がおもしろくてびっくりしました。解説ボランティアの方々の手づくりと思われるヘビの脱皮人形がよかったです。アナコンダの実物大の模型も見ることができ、一目でわかってよかったです。こういう手づくりの温もり感あふれる看板や展示がもっとふえるといいなということです。

以上の五つの意見と感想が出ておりますので、お知らせさせていただきました。

私からは以上です。

笠委員 地下鉄利用をふやすことは真剣に考えなければいけないだろうと思います。私も円山のバス停をいつも使っているからよくわかるのですが、あそこから上がったときに、ケンタッキーの横に出て、ここは一体どこなのかという感じになってしまうので、あの地下道をなぜ環状通よりこっち側まで伸ばせないのかというのが私は非常に不満なのです。また、28丁目の向こう側は、円山まで盲腸のようになっていて、向こうは一通なので全然行き場がなくて、あんなだだっ広い道路は全く要らないわけです。ですから、地下道であそこまで出て、そのままスロープで円山公園の中に上がっていくというものにすれば、そこにどんと円山動物公園というアプローチの意識が出てくるのではないかと思うのです。ですから、あの階段で上がって歩道いきなり出てくるというのは非常に残念です。

大阪の服部緑地は、御堂筋線から上がると、そのままスロープで知らぬ間に公園の中に上がっていくようにつくってしまっていて、あれは本当にきれいなアプローチなのですが、あの1丁を使えば、それがうまくできるのではないかと思います。あの盲腸は、昔の跡で残っているだけであって、もう要らないわけです。

金澤園長 そうですね。

山本委員 でも、現実的には、掘りたいという意思表示はできても、実際に掘るのはなかなか難しいし、時間がかかると思います。ですから、今のところは、早目に空気のあるところに出てしまって、そこから先を気持ちよくする方が現実的かなと思います。確かにケンタッキーの横だけでも、それはそれで、ぱっと見たときにわかるようにするという方が手順としては先ですね。目標としては掘りたいけれども、では今どうするのかというと、まだやれることはありますね。サインとかね。実際にその辺の人たちが動物を飼ってくれるというのもいいでしょうね。飼えと言うのはなかなか難しいけれども、円山は何だかやけに動物が多いよ、それを見ているうちに引き込まれたとか、そういうようなサインのあり方もあるだろうと思います。

また、地下鉄のことでちょっと言うと、私が高校か大学に行っていたころに、あの動物の顔を踏んで歩くのがすごく嫌で、踏まないように歩くのがすごく大変で、歩くのが難し

いところだと思いながらあの地下道を通っていた経験があります。足跡だったら踏んでも嫌ではないのだけれども、なぜ動物の顔にするのだろうか、センスがないなと思っていました。

原委員 でも、私は今でも踏まずに楽しんで歩いています。

服部委員 動物という生命をはぐくむためにはいいのかもしれませんがね。

きくち委員 あのタイルを使って、去年、ある一つのやつから始まるドラマをつくろうという企画案があったのですが、たしか円山動物園の反対でだめになってそのドラマができなかったと思ったのですけれども、そんなことはありましたか。

事務局 どんなドラマですか。

きくち委員 UHBのドコモのドラマだったのです。去年、ペリカンのところで撮りましたよね。

きくち委員 ショートドラマです。

きくち委員 すごくおもしろい案だったのに、円山動物園にもっと来たくするような案だったのになくなったから、何かあったのかなと思ったのです。

事務局 一般的には、むしろ役所としてはそういうものを誘致するような組織までつくって、結構気合いを入れてやっていますので、考えられない話です。

きくち委員 女の子が喜ぶようなお話の展開で、そこから何か生まれる、そういう秘密のワードが隠されているタイルみたいなものを広めようというものだったのです。

事務局 ちなみに、うちの担当者は記憶にないと言っています。

原委員 前回、馬車で地下鉄のところまで迎えに行っていた話がありましたけれども、公園道のところは馬車と人だけが通るような道になっていけば、もっと楽しくて、みんなが行ってみたいという気持ちになるかなという気がします。

服部委員 やはり、あそこの歩行者天国というのは大変大事なことだと思います。動物園が再生するためには、何とか車をストップさせなければいけないというのは、大きなコンセプトの一つに入ってくるだろうなと思います。そういう意味で、地域連携と動物園の再生というのは、アプローチの部分から地域連携をしていかなければいけない。そのためには、どうしても車をストップさせなければいけないと思います。

原田委員長 あそこで車をストップして困るのはどこですか。神宮ですか。

金澤園長 時間帯によりますけれども、今、まさに裏参道のところを上下している車というのは、確かにここの円山西町、宮の森地区が多いのですが、小別沢トンネルを抜けた福井地区、西野関係の地域が今は結構多いのです。今、北1条側が大分通れるようになりましたけれども、それでもまだ結構こっちにおりてきますから、あの影響は、円山、宮の森、西野、福井のあたりになると思います。

笠委員 ただ、これはあくまでも土・日、祝日でいいと思うのです。

金澤園長 土・日、祝日は影響がないと思います。この近辺の人だけだと思います。一時はずっとやっていましたからね。

笠委員 昔はやっていたので、できるはずだと思います。

金澤園長 私は、あれで警察にとめられて、「入ってきたらだめだ」と注意されたのです。

きくち委員 ここを地下鉄までおりていくところですか。

原委員 表参道につながる道は、昔は歩行者天国だったのです。

笠委員 昔は、このロータリーから向こうは土・日はとまっていたのです。それが、なし崩し的にまたびゅんびゅん走るようになったのです。

原委員 随分昔の話ですよ。

笠委員 もう20年くらい前だと思います。

金澤園長 きっと地元から意見が出ているのだと思います。

きくち委員 実際に上がってくるときは怖いですよ。

笠委員 あそこのトイレの前の横断歩道を渡るのは決死の覚悟が要ります。あれは、完全に死角で、いきなり車が飛び出してきましたから、本当に危ないです。ここの前の信号も、子どもが亡くなって初めてついた信号なのです。あそこに桂市長の名前が書いていますけれども、委任信号機というもので、道警ではつけないといったものを、市でつけさせてもらうということだったのです。僕は、あそこを毎日通りますから、よく事故が起きないものだと思って見えています。あそこは本当に怖いので、それで歩いてこいというのはちょっと失礼ですね。

原委員 以前は、主に日曜日だったと思いますが、あそこの道路は人でいっぱいでした。地下鉄になってからも人がいっぱいでした。そういう記憶があります。

笠委員 今、バスが土・日、祝日だけ、裏参道を通って大倉山まで行くバスがあるので、それが影響を受けるという問題が出てくるのです。昔は、この前まで西町へ行くバスが来ていたのですが、今はここにとまらなくなりました。今は西口の方にしかバス停がなくなってしまうと、一度、こっちまでぐるっと回って西町に上がるということをやらなくなりました。ですから、影響があるとすると、土・日、祝日に、札幌駅から円山公園を通って大倉山に行くバスが1時間に1本くらいあるのですが、その問題だけだと思います。それは、あまり人は乗っていないですから、そんなに大きな影響はないと思います。

原田委員長 だったら、これは強力に進めたらいいかもしれませんね。

笠委員 まず簡単にできることだと思います。

事務局 実は、大倉山のところには、地下鉄の駅からぐるっと回らないで、円山動物園を経由して大倉山まで行けるという運動を始めたばかりなのです。ただ、まだ実現のめどは立っておりません。

金澤園長 どっちにしても、西門の方でとめられるので、確かに、ここにとまるとすぐそばでおりて入れるというのはいいのですが、西門はちょっと歩きますから、そこだけ我慢できれば十分可能かなと思います。

でも、先ほど出ていましたように、地下鉄利用をふやしたとしても、8割くらいが車な

のですよね。それがどれくらい減るかですね。どっちにしても、土・日とゴールデンウィークはこの駐車場がいっぱいになります。それこそ、駒澤苦小牧人気がどのくらい続かわかりませんけれども、駒澤がゲームをすとなったら動物園に来る車が入れないのです。それにどのくらい影響が出てくるかですね。ピーク対策はしなくていいけれども、それなりの対策はやっていかなければならないのかなと思っています。

前にご意見があった中にもあるのですが、駐車場の重層化というか立駐化を図る方法は何かしていかないと、台数がふえないですからね。敷地はこれで目いっぱいです。

服部委員 確かに、ここに駐車場を設けるといのは、幾ら駐車場を誘導していても、車というのはどうしても必要だろうと思うのです。これは、避けて通れないテーマの一つだと思います。そういう意味では、どこか離れたところに駐車場を確保すべきで、公園の中にはもう無理ですから、そうすると、シャトルバスなり、先ほど話があったような馬車なりを仕立てて、駐車場と動物園のシャトル馬車を仕立てるといことも考えていかなければいけないのかなと思います。

ただ、見渡したところ、駐車場用地となるような札幌市の土地はこの周辺にはないわけですから、民活を利用していかなければいけない、民間と連携していかなければいけない。そういう意味では、地域連携というのは大変大事な課題だろうと思います。水と森と動物というコンセプトは大変大事なことですし、それに地域との連携がそれにかかわっていく、そういった課題が生まれてきているかなという感じがします。

原田委員長 私は、地域連携ということで言いますと、本当に宮の森、円山という地名があるのかどうかかわからないですが、円山という地名はあるのですか。

金澤園長 地名としては円山西町です。

事務局 連合町内会の名前としては、この下が円山連合町内会なのです。

原田委員長 さっき言いましたけれども、まちづくりセンターがあるでしょう。

金澤園長 円山にもあります。この近くでしたら円山と宮の森にあります。

原田委員長 では、これは先の長い話なので、円山まちづくりセンターと宮の森まちづくりセンターとちょっと連携して、そういう人の流れ、来やすい流れにするように協力してもらおうように話し合いをしていった方がいいと思います。駐車場ばかりではなくてね。

金澤園長 まちセンの方にはもう既に話をしてありまして、リスタート委員会を開いているから、いずれ話に来るよということは言っております。どっちにしても、中間報告が出た段階では、それこそ連合町内会を対象にきちっと説明していかないと、理解を得られませんからね。

原田委員長 あとは、これはだめかなと思いつながらお聞きするのですけれども、円山公園というのは、緑のゾーンが西の方にありますね。ユースホステルがあったあたりですが、あっちの方はどうなのですか。あの跡地などは全然使えないのですか。

事務局 所管しているところとしては、あの緑をそのまま残すという方針があります。ですから、動物園が使ったりすることは差し支えないけれども、木を根こそぎ伐採して動

物園の施設を建てるようなことは余り望ましくない。木をある程度残した状態のままでするような使い方であれば全く不可能ではないと思います。

原田委員長 最近のはやりではないですけども、地下を掘って、上をそのままにしておくと。えっ、ここがという感じで、表面は草がぼうぼうだったりするのですが、よく見ると人が住んでいる。下がちゃんと掘られているんですね。そういう地下空間の駐車場のようなのもあるのではないかと思います。

笠委員 この補助競技場というのは、補助グラウンドなんですけれども、ここは大倉山小学校のグラウンドとして、運動会はここでなければできないのです。大倉山小学校はグラウンドがない学校なものですから、毎年ここを使ってやっているの、それをやると相当問題が出てくるだろうと思います。

それから、大きい方はユースの森と言っているのですが、ここはエゾサンショウウオとかニホンザリガニなどがいる場所なのです。ここは、昔の校長先生が立派な調査をして、何のお金を使ったのかわからないのですが、素敵なリーフレットをつくって、非常に自然が豊かだということで環境学習として学校で使っているの、多分、そういうことになるとうちの問題が起きると思います。

ですから、やるとすれば、競技場なり球技場を建てかえるときに立体化とか、地下の活用とか、スタンドの下とか、そういうところの利用を考えるべきだと思います。ただ、そんな大規模な改修なり建てかえというのは今は見込めないでしょうから、難しいのしょうけれどもね。

原田委員長 そうすると、駐車場は現状維持という感じでしょうか。

笠委員 やりようがないというのが正直なところだと思います。ですから、円山球場を使わないで、1年休んで地下に掘るといえることができれば、それは可能かもしれません。

服部委員 でも、何カ所か、民間の駐車場と連携を図って、そこからシャトルで引っ張ってくるという手はあると思います。ただ、いろいろな角度から調べてみましたが、この公園の中には無理だろうと思います。

笠委員 この近くには民間の駐車場すらないので、非常に難しいと思います。車で来る人は、これ以上、キャパシティーとしては二丁にも伸びないと思うのです。ですから、今後、地下鉄利用が伸びたときにどういうふうに進んでいくかという問題だと思います。駐車場対策というのは、本当に土・日だけのピーク対策でやっていると、物すごく施設が過大になってしまいますから、それは本末転倒ではないかという気がするのです。

さっき出ていたキッドランドというのは、10年前に中島の子供の国をここに持ってくるのときの地元説明会で私はきつく言ったのですが、そのときに、なぜ風致地区にこんなものが要るのだという話をして、渋滞対策はきっちりやりますということだったのです。その結果が、歩道を全部1メートル狭めて、今の歩道は人がすれ違えなくなってしまったのです。子どもの手を引くとすれ違えないような歩道にしてしまったのです。それが10年前の札幌市がやったことですから、私はあれは絶対に許せないと思ったのです。

だから、そういう一時的な混雑対策のピークで対応するというのは全く間違いだと思います。

原田委員長 キッドランドはどうですか。

笠委員 私は大反対だったのです。むしろ旗を立てて反対したいくらいでした。

原田委員長 余り入っていないし、経営している側も、これでは将来的にだめなのではないかと思っているに違いないと見えるのです。

笠委員 中島公園に Kitara をつくるときに、あそこにあったものを無理やり持ってきたのです。ここにももともとあったのですが、それよりもちょっと大きいかないということを持ってきた施設なのです。

服部委員 あれは、建てかえの償却は完了してしまっ……。

事務局 今使っている施設についてはまだ償却が完了していないものもあるのですが、とりあえず、新しいものをつくっても、恐らく、減価償却は不可能だろうという経営的な判断があって、将来どうするかという明言はまだされていませんけれども、今ある施設を更新する考えは近々はないということです。ですから、やめるのか、当面、今の状態を続けるのかという選択肢の中にいるということです。

金澤園長 ただ、今の設備そのものは結構きっちりメンテナンスをしていますから、もつことはもつと思いますよ。

服部委員 利用者の推移というのはどうなのですか。落ちてきているのですか。伸びているのですか。

金澤園長 利用者は、去年の時点で単年度黒字が出たのですが……。

事務局 それは、節約したりしながらです。

金澤園長 ただ、全体の利用者の数は横ばいか、ちょっと落ちているかだと思います。動物園が減れば当然減るはずですが、向こうだけが伸びるということはちょっと考えられません。

服部委員 先ほど委員長の方からお話がありましたけれども、あそこは休憩の場所として非常にいいかもしれません。それが、ああいうキッドランドでなくても、休憩の場所で、動物を見ながら、あるいは、触れ合いながら休憩するスペース、ゾーンとして存在すれば、今、遊具場がなくてもいいのではなからうかと思います。考えてみたら、動物に対してストレスがあるのだらうかと思いますので、この委員会としてその辺の考え方をしっかりとらえておくべきだらうかと思います。これはイエスかノーかしかないもので、これがまだ新しく、あれを何とか活用しないと償却も大変だということであれば別ですが、償却済みのレベルでしょうから、あの部分は短期的にやれる場所ではなからうかと思います。何かに改善するという意味です。ね。

笠委員 私は、将来的には撤去すべきだと思っています。

服部委員 いえ、短期的にですよ。一番手をつけやすい場所だと思います。要は、撤去すればいいわけですからね。撤去して、最終的に総合ビジョンがどういう形でゾーニング

されているかで、もうつくってしまえば、第一時期として計画としてそれをやってしまえばいいだろうと思います。ただ、あれは物すごく人気があるよということであれば問題になります。

原田委員長 そんなにないのでしょうか。

笠委員 市民アンケートでは、そういうのが余りないからいいのではないのでしょうか。

事務局 ご意見箱で、利用者の方には比較的興味が持たれている場所で、苦情もあるのですが、小さい子どもたちは乗りたい、でも料金が高いという内容や、こういう遊具を設置してほしいという意見が結構あります。

笠委員 あの利用は、特に連休のときの利用はほとんど市外なのです。ほとんどというのは語弊があるかもしれませんが、連休の日は、朝5時くらいからあそこにずらっと車が並ぶのですけれども、そのナンバーを見ますと、ほとんど市外なのです。夜中を通して走ってきて、とにかく朝の9時に一番に乗り込んでという利用なのです。札幌市内の人は連休のときなどは大体行かないのです。ですから、その辺の問題で、そういうサービスを札幌市としてやる必要はないと私は思っていたのです。

服部委員 キッドランドを利用する客ということですか。

笠委員 地方にはそういう遊具施設がほとんどないのです。私の函館の弟も子どもと来ますからね。

服部委員 函館は護国神社のところに遊園地がありましたね。

笠委員 あれは、日本一古い遊園地で、レトロ風ということで有名になってしまっています。

多分、札幌市民の意見と利用者の意見とのギャップは、そういうところに出てくると思います。

原委員 ボランティアの立場で見えていましたら、今の展示の状況なら、動物を見ているうちに飽きてきて、遊びたいという子どもたちは確かに魅力を持って行きますね。園自体がもっと魅力あるものになっていく段階では必要ないものになっていくのではないかという感じがします。

笠委員 あれだけ騒音を発していたら、動物にとっても結構ストレスがあるのではないのでしょうか。ジェットコースターがいつもがんがん走っていますよね。

金澤園長 10年たってなれてしまったと思います。

服部委員 野球場の喚声の音にも動物たちは耐えているのでしょうかからね。

笠委員 地鳴りしますからね。

金澤園長 ふだん聞きなれていない音には反応します。例えば、ヘリコプターが上空にいるといったらちょっとだめですね。

原委員 この間、滑落事故があったときは騒いでいましたか。

笠委員 あときはひどかったですね。

高木委員 全体が小さいということを前提に話した方がいいような気がします。決して

広くなくて、広くもできないし、世界的に見ても小さな動物園だと思うのです。その中でできることということにとらえると、委員長の提案は理想がいろいろ入っていると思いますけれども、そんなゾーニングをするのは無理ではないかと思うのです。一つ二つくらいにゾーンを絞って特徴づけていくという方がわかりやすいのかなと思っていたのです。そういう意味では、キッドランドは要らないと思います。

原委員 今のゾーニングの話ですけれども、そういうことに関しては今おっしゃったとおりかなと思います。ある柱になるものはここで決める必要があると思いますが、やはり動物のことを一番知っていて、今後つなげていく力になるのは飼育員の仕事であると思っています。その飼育者の管理のあり方とか能力の引き出し、育成ということに関してのやり方などは、ソフトの面ということになるとと思いますが、その辺をもっと大事に考えた方がいいのではないかと考えています。

というのは、先ほどいろいろな方からあったように、確かに管理職側は短期的にかわっていく状況がありますので、それによって飼育員のあり方も変わるような気がしますし、意識の問題を変えるというのは、昔からの市の職員の意識を引き継いでいるところもなきにしもあらずだと感じます。そんなところで、どういうふうに飼育員の意識を変え、なおかつ育成していくか。

現在、今までの飼育職のあり方というのは高卒者に限られていますね。昔、何かでちょっと聞いたのですが、えさをやることと掃除をするということは高卒で十分だろうという考えがあって、以前はそういう採用の仕方があったというふうに伺ったことがあります。しかし、現在は、飼育するというのとはどういうことか、動物に対する考え方はどういうことかというのは、世界へ行って勉強するとか、いろいろなところで勉強するという飼育の方法が今はとられてきているように思いますので、高卒者のみならず、管理職になる飼育員がいてもいいのではないかという気持ちもあります。そういうやり方ができるものなのかどうか、皆さんの意見も聞いてみたい気がしますし、その辺を考えてみてはどうかと思っています。

齊藤委員 私は前回出席していませんけれども、委員長からの提案もすばらしく魅力のある提案だと思って拝見させていただきましたし、学校教育の方にも視点を当ててくださっているなというふうに見ていました。

冒頭の中にもありましたけれども、園という内側と外側の問題ですね。今は、どっちかという外側について随分話されたような気がします。外側というのは、実は非常に時間がかかったり、いろいろなところとの関係もあるので難しさがあるのです。でも、話し始めると外側の方が話しやすいというところがあるような気がするのです。

僕は、この小さな動物園にいろいろな機能を持たせることもいいのですが、実はいろいろな機能を持たせることによって機能一つ一つが見えなくなるような気がしてならないのです。例えば、環境教育というものがありますけれども、本当に環境教育という部分で学校から子どもたちが来るだろうかと思うのです。やるとすれば、よほどの条件をつけて、

例えば緑があって、川があって云々というのは学習にはならないですね。また、先ほどの遊具も含めると、いろいろな機能を持たせることによって特色を一つ一つ削っていくような感じがするのです。これもあるよ、あれもあるよというけれども、何があるのかと聞かれたら、動物園があるのですよねという感じになってしまう。

僕は、種の保存とかいろいろな問題があるのですが、今、このリスタート委員会が札幌市でも注目しているとすれば、何が一番アピール性があって、市民に訴えて、そして今何が論議されているかということをお伝えとすれば、言葉は悪いのですが、もっともっと楽しい動物園をつくる必要があるのではないかという感じがします。たくさん子どもたちが行こうと思う、それを保障するために道路はどうするのかということがあった方がいいと思うのです。

旭山動物園を意識するわけではないのですが、一つ一つの展示などで勝負しなかったら勝負し切れないのではないかという気がするのです。

ただ、もう一つは、先ほどいろいろありましたが、長いスパンの目標を持つことが大事だと思うのです。短いことを一つ一つやってもだめだと思うのです。長い目標と短い目標があるけれども、やはり魅力ある動物園ということでは、市民に対するアピール性を求めながら進めないと、学術的なことで云々といっても、それは内部でやってくださいで終わってしまうのではないかという感じがしますし、人事的なものも内部でやってくださいになってしまうと思います。これは、影の部分と表の部分のやりくりをしていかなければならないという感じを受けて聞いておりました。

そんな意味で、昔からずっとある動物園という日本語の持つ意味は、やはりレジャーですね。僕も、ある本を読んで、動物園というのは種の保存という役割もあるのだと、言われてみればわかるけれども、市民が持つ動物園のイメージは違うのだと思うんです。私たちは、そこにちゃんと正面から向かっていかないと、本当のリスタート委員会にならないのではないかという感じがします。

原田委員長 齊藤委員は、最も大事なことは楽しい動物園ということですね。

齊藤委員 言葉としては余りよくないのですけれどもね。

原田委員長 その楽しくするには何をしたらいいとお思いですか。

齊藤委員 一つは、集客力という意味では、旭山動物園のまねをするわけではないですが、内部的な提案がなされてこないとだめなのだろうと思うのです。例えば、先ほどありました遊具についても、内部をどうするかという問題で、それも有効な考え方だと思います。これは撤去していいのではないかとか、もっともっと小さな子どもを対象にした方がいいのではないかとか、いろいろあると思いますが、内部から上げていってはどうかと思います。

僕は初めて旭山に行ったのですが、なぜ子どもも大人もあんなにきゃーきゃーしているのかなど。円山に来て、何となくそういう姿はないというところがありますので、そこら辺にいろいろなものがつながっていくのではないかと思います。

車についても、ここですと園の中に駐車場が入る感じですが、旭山は周辺にたくさんありますね。民間の駐車場もあるのですけれども、何となく気持ちの上でも違いますね。

そういう点を考えると、見に行きたくなる、また行こうと思うものをつくるということを大事にしていかなければならないという気がします。

山本委員 今話を聞いていて、私はひねくれ者なのだなと思ったのですが、私は8月7日に子どもを連れて初めて旭山動物園に行ったのですけれども、二度と行きたくないなと思って帰ってきました。

金澤園長 そんなに混んでいましたか。

山本委員 混んでいるだろうなと思っていたのですけれども、すごくいろいろな本を読んだり話を聞いたりして過大に期待していたら、何だと思ったのですね。

シャトルバスも、あれだけ傾斜が厳しかったらどうしても必要なのですよ。もっと乗せて上げればいいのに乗せていないのですね。

マーケティングをやっている目から見ると、PRだけでここまで持ってきたかなというところはなくもないです。私は円山動物園のことを愛し始めてしまっているのが厳しく見ているというところはかなり割り引かなければいけないのだけれども、ある一つのプランニングの常道にはフィットしてどんどん大きくなってしまっているのです。

しかし、来ている人は、最初に来ている人ともう違いますね。私は初めて行ったのですが、みんなしゃらしゃらと行ってしまっているし、ボランティアの人たちも一生懸命やっているのだけれども、疲れ果てているし、結構いっぱいいっぱいな感じがしましたね。清掃の問題も、すごく混んだ時期だから目立ちました。駐車場が外にあるといっても、ほかに何も無いところなのです。それは非常に利点でもあるし欠点であることを最大化して、よくここまで頑張ったなと思ったのですが、あれを見ると、円山動物園はまだできることはいっぱいあるではないかと思いました。旭山動物園に比べると物すごく広い動物園ですよ。原始林の中を歩くことだってすばらしい資産なのに、何で歩かないのだろうと思うのです。もうちょっと価値を変えて、車を通すのもよし、歩くのもよし、たくさんのオプションの中から自分で選んで来れるというよさが、まちの中の動物園だからあるのではないかなという感じがします。

ですから、旭山のことは旭山にやっておいてもらって、ここはここで何が一番特徴なのだろうと考えた方がいいと思います。

敢えて極論すると、大人の動物園でいいじゃんと思ったりしています。

原田委員長 私は、日本全国の動物園が全部旭山になったら困ってしまうだろうと思っています。旭山は旭山で、あれでいいのではないかと思うのです。一度行ったらいいのではないかと思うのです。一度も行かないと気になるなという感じですね。では、円山はどうするかという問題がこのリスタート委員会なのであって、旭山の後を追っても二番せんで、はっきり言いまして客は来ないと思うのです。

例えば、旭山は、ホッキョクグマにしても、ペンギンにしても、観ることのできる距離

が短いのです。とまらないでくださいと叫んでいるでしょう。しょうがなく、見たいのに見れないで先に行かざるを得ないというところがありますね。そういう意味では、あれでみんな満足しているわけではないと思うのです。でも、ああいう見せ方はやはりびっくりする人は多いわけで、それはそれでいいではないかと思うのです。

だから、円山はそれとは全然違うけれども、どういう魅力を輪をかけて押し出していかということを見出すこと、あるいは、それをつくり出すことが今求められているのであって、別に旭山を追う必要はないし、逆に追ってはならない。円山なりの独特のやり方を何か出していかなければいけない。ただ、これは難しいことなのです。つくらなければいけないですからね。そうじゃないと、みんなどこかの二番せんじになって、上野の二番せんじだったり、多摩の二番せんじだったりということになるわけです。独特のものをつくっていくには、みんなが、こんな難しそうなことはやれないではないかというあたりだと思います。それで、そこから帰ってきた子が、「お母さん、こんなこと知ってるかい」ということをとうとうとしゃべれるようなものですね。飼育員がその瞬間を教えてやってみたいなものだと思うのです。

ですから、ただ動物を陳列しておいてもしょうがないわけで、動物のここを見るのだということ、審判員のように、アウトとかセーフとか言っていないといけないのではないかと思うのです。そういう意味では、動物園が非常にアクティブになっていなければいけないと思うのです。

そういう意味では、私は、生物多様性という一つの軸をつくったにしても、それをどう好奇心を持って見せられるかということが動物園のプロのやり口であって、それをみんなに教えてやるということが大事ですね。

例えば、この前もちょっと話をしたのですが、私は、山椒を筑波から持ってきました。寒いからだめかと思ったら、結構ちゃんと生きていて、アゲハチョウが卵を産んでいるわけです。さなぎになり、そこからまた出てくるでしょうから、そういうところを見れるのだよと。山椒は、この前、小宮委員が原産地ではないのでとおっしゃっていましたが、やはり適応してここでも育つようになっているのです。多分、あれはどこかにいっぱいあるのではないかと思います。そうやって種は受け継がれていっているところがすごくすばらしいところなのです。こんなに寒いところというものが、意外とちゃんと育っている、あるいは繁殖しているということがあるのではないかと思います。そういうものに少しでも手を差し伸べてやる。

だから、例えば円山動物園にそういうものをたくさん植えておくと、必ずアゲハチョウがやってくるわけです。十何階でも来るのですから、必ず来ますよ。そうやって、この木のこの枝はあげてしまってもいいと思うのです。囲ってもいいのですよ。それで、下の方から枝に至るまでのところを囲ってあげて、これは君の責任だよという、何日かごとに気になって来るわけです。そういう子は大抵パスを持っているので、いつもフリーで入ってこれる。そして、夏休みに何かを書けるわけです。

小さい羽のついた虫がそのさなぎに卵を産んで、ウジみたいな幼虫がさなぎを食べてしまう、あいつにはかわいそうなことをしたとその子が思えば、それはすばらしい体験ですよ。

そのように、生態系の中で起こっていることを飼育員が指導していかないと、「ほら、飛んでいるよ」ということだけでは環境学習にも生態の学習にもならないので、私は、小さい子には、そういう出会いをたくさんつくっていくということが大事なのではないかと思うのです。

だから、何かを植えれば、それが好きな虫が来る、何か実をつければ、それが好きな鳥が来る、何かが生まれれば、それを食いにヘビがやって来る、そういう関係を教えてあげなければいけないと思うのです。子どもは、そういうことが遊具に乗るのと同じようにおもしろくて、好奇心で目がきらきらするのだと思うのです。それが動物園で教わることであり、発見することであり、ちょっとしたお小遣いで枝に投資ができて、その枝の牧場で自分の虫を飼うわけです。そういうような学習の環境をつくっていくということがすごくいいのではないかと私は思っているのです。

ですから、斉藤委員がおもしろいこととおっしゃいましたけれども、まさにおもしろいことを円山でやる、ただ、旭山とは違うおもしろいことをやろうではないかと思いたいのです。

原委員 先ほど、来園者もみんな楽しそうにきらきらしているというお話がありましたけれども、動物が生き生きしてきらきらしているから、見る側も同じ気持ちになって帰れるというのは、円山も同じであっていいと思うのです。いかに動物たちをきらきらさせるかというのは、飼育を担当する者であったり、園の中での協力があってできることだと思うので、そういうつくりがあると、自然と一つずつ積み重なっていくのではないかという思いがあります。

斉藤委員 発想としては同じだと思うのです。結果としてはシロクマでやらないかもしれないけれども、来園者に、ただ見るのではなくて、その姿から学んでもらいたいことがあるというものをつくっていかないと、やはり訴えないのだろうと思うのです。ですから、まねではなくて、もしかしたら共通の発想はあるのかもしれませんが、そういうもので、魅力あるといいますか、魅力あるものは、子どもにとっても楽しくてまた行こうということになるだろうし、それこそアゲハチョウが飛ぶ瞬間というのは教室でもつくれますから、いろいろなことをやれると思うのです。

原委員 弁解するわけではないのですが、昆虫館のことを言いますと、飼育の方でしなければいけないことが多くて、環境をつくったりすることで精いっぱい、説明までできないというところがあるのです。それは私たちボランティアがしなければならぬのですが、たまたま行ったときに、実際にチョウチョウの卵がここについているよ、これはこの木にしかつかないんだよ、絶対に生態はこういう形で卵がつくんだよ、さなぎはこんなふうになるんだよ、探してみても言う、子どもたちはやはり目を輝かせてくれるの

です。ですから、単にキーパーだけではなくて、先ほど園長が今は200人いると言っておりましたが、その中でガイドボランティアという立場の者もすごく大きな影響を与えるものを持っていると思うのです。その辺をうまく生かしていけたら、よりいいものができるのかなと思っております。

高木委員 さっき大人の動物園という言葉が出ていましたけれども、私は子どもという対象をもっと明確に打ち出した方がいいと思うのです。子ども動物園ミュージアムというようなものですね。環境教育の有名な言葉で、大人に対するプログラムと子どもに対するプログラムは全く別ものである、それを加味してつくっていかねばいけないという一つの格言のようなものがあるのです。子どもが楽しく好奇心を持って来てくれれば、それについてくる大人もいるという見方があるので、子どもに対しておもしろさをどうつくっていくのかということ大きな柱にした方がわかりやすくなるのではないかと思います。キッドランドは別ですけども、そう思っています。

服部委員 旭山動物園は大人の動物園なのでしょうか。子どもの動物園なのでしょうか。どうお考えになられますか。

高木委員 僕が思うに、旭山は、行くと動物がいつも違う表情をしているのです。動き方が違うのです。僕は旭山動物園が好きなのですが、行けばいつも違うのです。

山本委員 私は、ディベートチックに意図的に反対のことを言っているだけなのですが、自分なりの解を言ってしまうと、動物園が好きな気持ち、動物が好きな気持ちというのは、子どもであろうが、大人であろうが、そうだと思うのです。私も小さいころから動物がすごく好きで、どっちかというとならぬ野良犬の方が好きくらい、そこら辺にいるものが結構好きなのです。そういうものを子ども心と呼んでしまってもいいかわからないけれども、そういう気持ちを持っている人は来るのではないのかなと思います。

そうはいつでも、施設の色だって、あるターゲットを決めないと何色にしたらいいのだろうとならないから、そのときのメインのターゲットはどっちなのかなと思います。今、少子高齢化社会になっていくときに、どっちの方がお金が落ちるのだろうかといった嫌らしい考え方も……。

高木委員 動物が好きな人をたくさんつくろうみたいなコンセプトがいいかな。

斉藤委員 結局、大人もシロクマのダイブは見たことがないのです。子どもと同じで、あの瞬間はほとんど童心に戻るのだと思うのです。でも、結局、対象は子どもなのだろうと僕は思います。

服部委員 私が高木委員にご質問を申し上げたのは、動物園というのは、動物好きの人はお客さんとして大変いいターゲットなのです。だから、動物好き集まれということで、子どもミュージアムもいいのかもしれないし、大人ミュージアムもいいのかもしれないけれども、やはりここは動物ミュージアムでなければならないと思います。その動物ミュージアムをどういうコンセプトでやるのかというと、レクリエーション機能を持たせましょう、あるいは情操教育をしましょう、環境教育をしましょう、そして種の保存などの

研究をしていきましょう、こういう描き方が出てきているわけですから、これを基本コンセプトとして、次に何をしたいかという対策を設けていかなければいけないと思うのです。

この辺の基本構想は皆さん方が一致しているところであって、そういう意味では、円山という環境要因を生かしながら円山動物公園という描き方というのは大事なことだと思っ  
ていまして、私は、委員長が描かれたものを見て、そんなふうにはできるのだと非常に確  
信を得たと思っております。ぜひその辺で進めていってほしいと思います。それによって  
円山動物園らしさが出てくるのではないかと思います。いずれにしても、動物ミュージア  
ムでなければならないことは間違いないわけですから、そういった観点から推し進めてい  
くと。

そして、結果的に何人集まるのか、幾ら収益があるのかというのを最終的に作り上げ  
なければなりません。それは最終的に収支計画をつくっていくことになると思いたすけれ  
ども、できるだけすべての人が、札幌市民、北海道民もみんな来てもらえるような動物園  
づくりというのが大事になると思います。

原田委員長 ちょっとお聞きしたいのですが、アンケートの結果で、入場料が600円  
というのは普通といっています、パスポートについては安いといっているのです。これ  
は、経済的な苦境にあるわけですから、パスポートはちょっと高められないのでしょうか。

服部委員 その辺は、いわゆるメンバーシップで、パーソナルメンバー、ファミリーメ  
ンバー、カンパニーメンバーという形の中で連動しながら作り上げていくことになるの  
ではないでしょうか。

原田委員長 ただ安いだけではなくて、このカードはどういうサービスを受けられるか  
ですね。ですから、あとはただですではなくて、Aというパスポートはこういうサービ  
スが受けられます、Bというパスポートはこういうサービスが受けられますという形に持  
っていくべきではないかと思っています。

服部委員 動物好きな人集まれますから、そういう意味ではメンバーシップ制度、サポ  
ーター制度というのは大変大事なことだと思います。私は、逆に言えば、年間パスポート  
という今のあり方は必要なくなってくると思いますし、それが経営を圧迫している要因に  
もつながっていると思います。ですから、もっとサービスを強化して、付加して行って、  
メンバーシップ制度の中で通年来てもらえるようなシステムを構築していけば、それが5,  
000円であろうと、1万円であろうと、5万円であろうと、何ら問題はないのではない  
かと思います。また、そうすべきだろうと思います。ほかと一緒に600円だから普通  
だ、あるいは、旭山動物園もそうだったと思いますが、ほかも1,000円のパスポート  
をつくっているから同じというのでいいのか。ここも変えていいと思うのです。

原田委員長 企業協賛というのはどうでしょうか。

服部委員 それは大いにやるべきことです。

原田委員長 そのかわり、寄附してくれた人のプレートのようなものがどこかにきちん

と張られるとかね。

服部委員 北海道神宮だって協賛したらちゃんと書いてくれるのに、動物園が書かないということはないと思います。

原田委員長 動物園は、今、どこかに張り出してあるのですか。

金澤園長 先ほどありましたけれども、今、ボランティアで塗装したところは出していますし、北海専門店会でやっているものは北海専門店会から寄贈を受けましたというふうに出しています。それから、そこを出たところの情報コーナーにぬいぐるみがいっぱいありますけれども、あれもいただきものなので、会社の名前をついたプレートを置くという形で今はやっています。そういう企業協賛はこれからふえてくると思います。

それから、先ほどらい出ていますファミリーメンバーとか、場合によっては前々から出ている動物ファミリーのようなものが出てきたときに、そういうプレートというのはこれからはなければならぬでしょうね。それは十分用意していかなければならないですし、ほかの園でもやっているところがありますから、そういったことはきっちり対応していきたいと思います。先ほどらい出ていますように、年間パスポートの種類によってサービスの提供が違うというのは、まさにそういうところで違いを出せるだろうと思います。

それから、先ほど昆虫の話が出ましたけれども、今、いろいろな昆虫を呼び寄せることができるという取り組みをしています。飼育員がそれぞれいろいろな角度で昆虫を寄せて、昆虫が寄ることによって、それを追いかけて鳥が来るという仕掛けをやっています。

例えば、ヤナギの木を植えているのです。熱帯動物園のライオンの陰くらいに植えているのですが、それは、いろいろな角度で、いろいろな機会に、動物にエンリッチメントの関係で使ったりすると、そのヤナギを育てることによって、そこにチョウチョウが来て卵を産みつけていく、それを追いかけて鳥が来るという仕掛けになっているのです。だんだんそのサイクルがよくなってきていると思います。

もう一つは、オオムラサキですね。熱帯植物館の陰にエゾエノキの木がありまして、実は昔いた職員が25年前に植えたもので、それはオオムラサキが繁殖するための木なのです。樹液を吸うのは別の木らしいのですが、繁殖はその木でなければできないそうなのです。そして、そこにオオムラサキが来るようになったのです。25年前に植えたロマンがやって出てきたのかなという状況です。

ですから、そういったものをもう少し展開することによって、昆虫みたいなものをしっかり売り込んでいけるとと思います。

今、飼育員が既に取り組んでいるのですが、ニホンザリガニもふ化させていますし、ルリボシヤンマというトンボを飼育しています。そんなものもこれからどんどん広げていけるかなと思います。

そういう意味では、いずれ近いうちに、札幌市として、動物園としてきちっと取り組みますということを打ち出そうと思っています。リスタート委員会と並行していきますが、そういう仕掛けに動物園としてもしっかり取り組んでいるということは出していこうかな

と思っております。

それから、リスタート委員会と並行して、今、飼育員からいろいろなアイデアをもらっています。飼育員全員というわけにはいかないのですが、何人がまとまって、それをプロジェクト風にして、まさに議論をしている真っ最中です。飼育員全員からレポートを出してもらったのですが、ああしたい、こうしたい、それこそ担当動物に限らず、園をどうしたらいいかという意見がありますので、それらを整理したものを来月の委員会には、動物園側の飼育員同士の話としてはこんなのだというものを出せると思います。ですから、リスタート委員会はリスタート委員会で、そこに動物園としてはこういう考えがあるよというものを出して、すり合わせをするような形にしていきたいと思います。

正直言いまして、動物園の専門家は小宮委員しかいないものですから、うちの飼育員がフルに活動していかないとカバーし切れないという問題があるので、そういう形で提案していこうと思っています。

いずれにしても、一回まとめたものは委員長と相談させていただきますけれども、そういった整理をしている真っ最中でございます。

原委員 先ほど、原田委員長が水辺のエリアに関してはすぐにでもできるのではないかとおっしゃっていましたが、あそこの川は管轄でいうとどこになるのですか。

金澤園長 市の川です。難しいところなのですが、今、コンクリートでかたまった川をそのまま使うのはちょっと難しいです。あそこのわきはちょっと平らなのですが、そこに水を通して、池というか、湿地帯をつくることは不可能ではないと思います。

原委員 川自体をもとに戻す形というのは難しいのですか。

金澤園長 そして使った水をそのまま返すと。川というのは水利権がありますから、10リットル使ったら、10リットル戻せばクリアできるのです。ですから、その仕掛けがうまくできれば不可能ではありません。

そして、湿地帯をつくれれば、さっきのザリガニとかトンボの話は解決できるかなと思います。そうすることによって、ある種、小さい昆虫の生態を子どもたちが見る、そのうち、いっぱいトンボが飛ぶようになったらつかむことも可能かもしれませんが、そこまで行くのは大分先の話でしょうけれども、そういうふうにするのは不可能ではないのかなと思います。

原委員 ホタルは大丈夫でしょうか。

原田委員長 ホタルがいたら素晴らしいですね。

金澤園長 河川管理者としっかり議論をさせてもらった上で、事業化が可能かどうかを検討していこうと思います。そうすれば、先ほど委員長が言われた水生動物も、狭い範囲だと結構やれそうなのです。

しかも、あの沢は、はっきり言って未利用なのです。上の方にシカとトナカイがいる程度で、下は原始林にくっついている沢でほとんど使われていませんから、そこは不可能ではないと思います。余り木も切らないで十分可能なのかなと思います。ただ、あそこに人

が入っていく園路をきちっと整備しなければならないということがあります。そういった範囲ではできるのではないかと思います。それが、将来、もっと大きな鳥とかフクロウとかオオワシのようなものをうまく使えるようになったらラッキーなのですが、なかなかそういくかどうか、それをやるとしたら我々が頑張っていかなければなりません。

野生の回帰ということは、2回目に相当議論されていましたが、動物園の取り組みとして不可能ではないと思っています。

原田委員長 私は、これからはそういう取り組みが必要なのではないかと思います。一個体として、実物はやっぱりすごいねで終わらないで、これは何を食べているんだ、そこにいるじゃないか、その食べられるえさは何を食べているんだ、そういうふうに回っているわけですから、そのシステムを理解していくということですね。そうでなければ環境を保てないのだと、みんなグリーングリーンと言うけれども、グリーンというのは本当はそうたやすいことではなくて、そこにちりが積もって、そこで虫がちゃんと食べてというふうに回っているわけです。その世界を学習できるような動物園になってほしいなと思います。

子どもというのは、そういうことに物すごく好奇心を持ちます。最近、ザリガニをとるといっても、こいつはどういうところに生きているのかと。そうすると、そこで見た世界というのは、旅などをすると、「ここに必ずいるよ、お父さん」みたいになってくるわけですよ。やはり、そういうつながり方が一番いいのではないかと思います。

服部委員 最後に一つ、これはお願いですが、今すぐやらなければならないことは徹底的にやるというのが大変大事だと思います。例えば、レストランの問題、キッドランドの問題、それから200名の再生の意識改革、この辺をマニュアル化していったら早くにつくり上げていくべきだろうと思います。

一番の問題は、きくち委員がおっしゃっていましたが、私もきょう食事をいただいてきたのですが、サービスが悪いですね。まず、水がないのです。「ここで一番おいしいのは何ですか」と聞いたら、「ラーメン」と言うので、ラーメンをいただいたのですが、水がないのです。「水はどうしたの」と聞いたら、「きのうまで置いていたんですけど、きょうは置いていないんです」と言うのです。どういうことなのかなと思いました。ハエはたかるしね。「お金はどこで払えばいいの」と聞いたら、「こっちへ来てください」と。隅から隅まで大変いい勉強をさせていただいたのですが、ぜひ皆さん方も、ここで食事をなさって、モラルのレベルの低さ、再生へのモラルのなさ、そういうことをもっと明確に見ておくべきだと思います。

ましてや、メニューも普通のものしかなくて、動物園らしいメニューが一つもないのです。私だったら、モンキーランチとかシロクマランチというものがあってしかるべきかなと思います。

どうしても、あのハエの中では食事はしたくないですね。

そういう観点からいって、モラルの向上ですね。はっきり言えば、再生に向けたモラル

委員会を設置して、モラルの向上をしっかりと描いていく必要があると思います。これは、企業ではあり得ないレベルだと思うのです。本当に再生するといったらきょうからでもやらなければいけない。そういう意味で、四十数名の札幌市職員だけのレベルを上げるのではなくて、やはり200名のレベルを上げていかなければいけないと思いますので、それは今すぐにでも、あしたからでもやらなければならない課題だと思います。

先ほどからお話が出ていたように、とにかくビジョンが描かれましたので、そのビジョンに基づいて中期、短期に分けて課題を列挙していくべきだと思います。大体きょうはいいところが出たのではなかろうかなと思います。

何度も申し上げますけれども、今やらなければならないことはすぐにやるということが大変大事だということで、最後にご意見を述べさせていただきました。

原田委員長 ありがとうございます。

大谷委員、何か一言ありますか。

大谷委員 考えていたことが原田ゼミの講義の中で全部出てきてしまったので、萎えていました。

まず、組織の中の人のあり方というのは、藻岩山委員会のときに感じたのですけれども、あそこは振興公社というところが入っていて、やる気のなさでは定評があったような感じだったのですが、魅力アップ委員会というものが行われて、その後に行ってみたら、全く変わっていらしたのです。人がこんなに変わるものかと思ったくらいですから、性急にモラル向上委員会のようなものをつくってぎゅうぎゅう指導をするよりは、自発的なところを待つ部分があってもいいのではないかと私は思います。

それから、動物好き集まれという話がありましたが、そういう人たちだけをターゲットにしていると、やはりどこかで行き詰まるのではないかと思うのです。ですから、中途半端なグレーゾーンの人も来れるような動物園にするべきではないかと思います。

そうしたときに、旭山のあり方というのは、お手本にしてもいいところはずればいと思うのです。行動展示というのはこれからの動物園のスタンダードになっていい部分があるのではないかと思います。

それから、私が動物園に来て何か退屈するなと思うのは、すべて理系で物が動いているという部分なのです。ルリアゲ八とか、何とかヤンマとか、そういうことに余り触手が向かないといいますが、もっとアートの側面からも見て回れるような使い方ができればいいかなと思っています。その具体的なアイデアをちょっと考えているのですが、また今度にします。

原田委員長 ありがとうございます。

今、アートの話が出ましたけれども、それは私はまじめにやりたいところなのです。屋外美術館と動物、アートを見て楽しんでいる動物がいると。動物を見にきているのかアートを見にきているのかわからないというか、そういう公園があってもいいのではないかと思います。

山本委員 それと方法論は全然違うけれども、考えてみたら、上野公園というのはすごいところですね。私は、たまたま行って、上野動物園には行かないで国立博物館で開催中の伊藤若冲展の方に行ってしまったのですが、あれはアートな動物がいっぱいいるのです。これとこれが一緒のエリアにあるというのはすごいねと思ったのです。何となく示唆的です。

金澤園長 あれは、上野の山にコンパクトに密集しているから……。

山本委員 大学もありますね。

金澤園長 ですから、行ったついでにこっちに寄れるということができるところはすごくいいと思います。

原委員 今回、公園として考えたときに、私も上野のイメージがずっと頭にあるのです。文化的であり、美術館があったりとか……。

原田委員長 ここは、ちょっと行ったところに彫刻美術館がありますね。

きょうは、こういうところでもよろしいでしょうか。

出し尽くしていないとは存じますが、予定時刻を約1時間オーバーしております。私がしゃべり過ぎてしまったのが大失敗でしたけれども、まだまだこれから続いてまいりますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

### 3. 閉 会

原田委員長 きょうは、長時間にわたりまして、ありがとうございました。

以 上